

女・性の解放と資本主義

I. 世界の文化地図と女性アート

1. 資本主義もっとも発達した地域と性の解放運動・フェミニズムが起きた地域が重なるのはなぜか？

2008年の夏、東京で開かれたあるコーポレート・ガバナンスのセミナーにおいて、アメリカのカウンセリング会社 IBC (Intercultural Business Center)が作成した「世界の文化地図(Cultural World Map)」という資料が参加者に示された。¹

この地図のユニークな点は、そこで描かれる世界が大きくみて二つの地域に色分けされていることである。それらは、ひとつには知識の交換と契約による合意、すなわち「法的規範(Legal Code)」にもとづいて社会のルールが成り立っている地域と、もうひとつの、いまだそうではなく、「道徳的規範(Moral Code)」あるいは「宗教的規範(Religious Code)」(もしくは双方の混合)が支配的な地域である。

この地図が金融界の専門家たちに提示された背景には、おそらく情報の交換と契約による合意の遵守という、資本主義が円滑に機能するための前提条件が自明のものとして受け入れられている地域が、どこにあたるのかを明白するとともに、その一方で資本主義が機能するうえでの前提条件が、今日でもなお社会の優先的前提とはなっていない地域が、地球上に数多く存在する事実を浮き彫りにすることで、グローバルな金融戦略に役立てる意図があったものと想定される。

注目に値するのは、「法的規範(Legal Code)」、すなわち資本主義を円滑に機能させるうえでの前提の整った地域が世界に占める割合が、意外なほど小さいことである。具体的にみるとそれは、アルプス北方のヨーロッパ諸地域および、北米アメリカ(英語圏カナダを含む)に限定される。その他の地域では、いわゆる西洋を一般に思い浮かべる際に含まれるフランスやスペイン、イタリアといった南ヨーロッパ地域、それに日本や、中国、インドなども含め、この「文化地図」によれば、そこに暮らす人びとは、本音の部分で資本主義に必要な前提

¹ Ikuko Atsumi, MA/Ph.D.eq. & IBC Group, *Cultural World Map*, 2006 Multicultural Playing Field LLC, PO Box 795, rumson, NJ 07760-0795, USA.

を受け入れて行動していない、ということになる。

ここでは、この「文化地図」の学問的な妥当性を吟味しようとしているのではない。しかし、この資料を目の当たりにして特筆しうることは二つある。一つは、この「地図」の正当性の如何にかかわらず、国際的な金融の現場で活動する者たちが、すでに今日では経済のグローバル化が否定しがたい現実として語られて久しいのとは裏腹に、ここで提供される情報すなわち、資本主義を成立させる前提条件が社会や文化にしっかりと浸透している地域がアルプス北方のヨーロッパと北米アメリカ、すなわちいわゆる「プロテスタント」の国々にほぼ限定されている事実を知ったうえで、企業戦略を練っている可能性が高いことである。

二つ目に特筆すべき点は、これから行おうとする考察にとって、とりわけ重要な意味をもっている。それは、資本主義がもっとも発達した地域として地図のうえで示されるアルプス北方ヨーロッパと北米アメリカが、じつは、20世紀後半期にセクシャル・レヴォリューションとフェミニズムが激しい運動となって社会を揺るがした地域と見事に重なっていることである。これら二つの要素、資本主義的な精神の浸透と性の解放運度とのあいだには、どのような関係がみいだせるのだろうか。これが、今学期の講義が問題にしたいテーマである。

2. キャロリー・シュニーマンの『胎内からの巻物』が問い掛けるもの

白いシーツを掛けた台座のうえに、全裸の女²が膝をやや折り曲げた開脚姿勢で立っている。彼女は、股間から細かく折り目のついた紙紐をずるずると引きだすと、その先端を目線まで掲げ、紙に書かれた文字らしきものを一心に読みあげている。

1975年にアメリカのアーティスト、キャロリー・シュニーマンがおこなった『体内からの巻物 (Interior Scroll)』と題されたパフォーマンスは、資本主義がもっとも円滑に機能するとみなされる地域と、20世紀後半期に性の解放運動とフェミニズムがもっとも激しく要求された国々とが奇妙に重なるのはなぜか、

²本講義においては、性のもつ性格と解剖学的なヒトとの区別を明確にする目的で、女性的または男性的な性質や性格を問題にする際には〈女性〉〈男性〉を、解剖学的な対象を話題にする場合は〈女〉〈男〉という語をもちいている。その今日では、〈女〉という語は〈女性〉に比べ、場合によっては人格を見下すニュアンスがともなうことは承知のうえだが、以上の区別を明確にするうえでより適切な表現が見あたらないことから、この方法を採用している。

という先に提示された疑問を解明するための扉を開く格好の役を果たしてくれる。その理由は、シュニーマンのパフォーマンスが今日的視点からみて、いかに不可解で、場合によっては卑猥にさえ映ろうとも、彼女が自らの肉体を舞台に提示したものが、セクシャル・レヴオリューションとフェミニズムが、資本主義の精神がもっとも強く浸透した地域においてこそ起きる必然性をもっていたことを理解するために前提をなす要素のほぼすべてを、みごとに開陳してくれているからである。では、なぜそういえるのか。彼女のパフォーマンスは、具体的にわれわれに何を示しているのか。

3. パフォーマンスから読み取れる二つのキーポイント

『胎内からの巻物』を目の当たりにしておそらく最初に飛び込んでくるインパクトは、アーティストが裸であるという事実であろう。しかしそれとほぼ同時に鑑賞者の視線は、このパフォーマンスが示す二つ目の要素、すなわち何かの文字が書き記された巻物が引き出される女性の性器に、否応なしに引きつけられるべく仕組まれている。

a. 女性の性器の露わな提示がもつ意味 — 視線が女性の性器に集中させられることの意味：

裸をさらすシュニーマンがとった最初の戦略につづくものは、つぎの二点であろう。すなわち、あらわな肉体や女性器を誇示する姿勢と、女性器をロゴスに関連づける表現戦略は、おそらく西欧の女性だけが抱えてきたきわめて特異な問題と、それによってこそ成り立つ資本主義の本質へと、否応なくわれわれの関心を向けさせるのである。それら二点を要約すると、とりあえずつぎのようになるだろう。

- ① 性を罪悪視し、快楽の源泉とみなされる女性を敵視する文化を生きてきた女たちの葛藤。
- ② 快楽の根源たる女性を消去することによって成り立つ資本主義世界の真実。

この背後には、

- ・ 性から快楽を得ることを罪悪とみなすキリスト教的価値観があり、そこからは、
- ・ 女性に忌むべき性的快楽の体現者であるという烙印を押すと同時に、女性

を、創造力の源泉をなすファルスをもたない去勢された存在と決めつける西欧世界に特有な禁欲の視点が生まれている。

こうした独特な禁欲の世界を基盤に、男性のみがロゴス＝文字言語＝象徴的世界を徹底して占有することで成り立っているのが、「世界の文化地図」が示した西欧資本主義がもっとも浸透した地域である。その際に、資本主義を成り立たせるためにとられた女性的悦楽の消去という、西欧近代の特徴でありながらきわめて男性的な戦略の存在を浮き彫りにすると同時に、20世紀後半期に入って歴史上初めて、この男性的に塗り固められた世界に対抗する意識に目覚めた女性の側からの挑発こそが、シュニーマンのとった行動が意図したことなのであろう。

こうした性差をめぐる西欧世界に独特な歴史を共有しない非西洋人にとっては、このパフォーマンスは、深い違和感を覚えさせる要素を内包している。しかしまた同時に、例えば非西欧世界に属するわれわれ日本人は、資本主義を成立させるうえで欠かせない要素として存在していたこうした根底的な問題を、ほぼ完全に無視し、いわばそれを跳び越えるかたちで「西欧化」する道を選択してきたのだともいえる。

見るものの意識を女性器に集中させるシュニーマンがとった戦略は、60年代末から70年代にかけてのあの性革命の時代が、なににも増して女たちが怒りをもって自らの性器をあらわに提示した時代、すなわちかつてない規模で西欧の女たちが独自のセクシュアリティの模索へと踏み出した時代であったことを思い起こさせる。

だが、どうしてそれほどまでにあらわな肉体を、そして性器を提示する必要があったのだろうか。見渡す限りこの時代の女性アーティストらは、楽しげにでも恥ずかしげにでもなく、ある種の必然性と怒りを秘めた信念をもって自らの肉体や性器を誇示しているように見受けられる。こうした、見ようによっては暗く怒りに満ち、いわば神経症的ともいえそうなまでに切羽詰まった女たちの行為からは、そうした過剰な反応へと駆り立てた女性への抑圧構造が、西欧社会のなかで、われわれの想像をはるかに超える規模でのしかかっていたことがうかがえる。

b. 性器から引き出される巻物に文字が書かれてあることの意味：

シュニーマンの『体内からの巻物』において、とりわけ注意を引く点は、彼

女が性器から引き出す巻物に文字らしきものが記されていることである。これも一見不可解な疑問を呼び起こす。

西欧世界において、女性はロゴスをもたない存在だととらえられ、文字言語から閉め出されてきた歴史がある。とりわけ 16 世紀以降、民衆語（＝音声言語）から国民言語（＝文字言語）が男たちの手によって形成され、それが今日につながる近代的な国民国家の拠り所となるなかで、女性は言語を奪われた「沈黙する他者」と位置づけられてきた。したがって哲学者ジャン＝フランソワ・リオタールが、フェミニズム運動家を念頭において語るつぎのことばは、西欧においてラテン文字を当てることで民衆語（＝音声言語）から国民言語（＝文字言語）が創出された時期以降の、500 年近い男たちによる言語の占有化の歴史を背景においたものだと言える。

「書き始めるや、人は一人の男であるべく義務づけられることになる。書くということはおそらく男らしさの証なのである。たとえ女として〈女性的に〉書くとしてもその事実にかわりはない。女性的文体と称されるものも、そもそも男性的な領域のバリエーションでしかなく、またそうであり続けるであろう。」³

ことばをもちいて「書く」という行為自体が、西欧の歴史、とりわけ近代以降のそれにおいては、男によって完璧なまでに占有されてきた行為なのである。

先に紹介したシュニーマンのパフォーマンス『体内からの巻物』⁴は、そうし

³ Jean-François Lyotard, “One of the Things at Stake in Women’s Struggles”, in: Jean-François Lyotard, *The Lyotard Reader*, Oxford/Cambridge 1989. p.111. J・F・リオタール著、山縣 熙他訳、『異教入門—中心なき周辺を求めて』、法政大学出版局、2000 年、198 頁参照。

⁴ このパフォーマンスは、二度行われた記録がある。一度目は、1975 年イースト・ハンプトンにおいて、主に女性アーティストたちを前に行われ、二度目は、1977 年テルライド映画祭(Terruride Film Festival)の女性監督によるエロティックな映画を上映する企画の紹介役としてシュニーマンが招待されたのだが、彼女は映画の紹介をする代わりに突然このパフォーマンスを演じたと記録されている。なお、この巻物の内容が実際に批判する相手である「幸福な男／構造主義映画制作者」とは、じつは男でなく、アネット・ミッチェルソンという当時著名で活躍中であった女性芸術批評家、芸術史家に向けられたものであった、とシュニーマン自身告白している。David Levi Strauss, “Love Rides Aristotle Through the Audience: Boy, Image, and Idea in the Work of Carolee Schneemann”, in: Carolee Schneemann. *Up To And Including Her Limits*. The New Museum of Contemporary Art, New York 1996, p.28.

た意味で、西欧近代を支える言語世界のすべてを男性が占有してきた歴史的事実を照らしだすのに、またとない道標として作用するものだといえよう。シュニーマンは、自らの裸体をさらすことによって、西欧世界においては絶対的欠如として位置づけられてきた場所である女性の性器から引きだされる紙切れに、なんと文字言語、すなわち男たちが男性のみが神から授かる精神の賜物として誇ってきたロゴスが書き記されてあるという、絶対にあってはならない行為を、これ以上ないまで直接的に示してくれたのである。

4. 怒りを込めた裸体の提示-アンチ・ポルノグラフィとその断絶

以上に概観した二つの要素がもつ意味について、さらに考察を進めるうえで避けがたく意識せねばならないことは、シュニーマンをはじめ、すぐに思いつく数人を挙げるだけでも、Valie Export, Rebecca Horn, Krista Beinstein, Linda Montano, Ana Mendieta, Cindy Sherman, Marina Abramovic, Yoko Ono, Yayoi Kusama, Shigeko Kubota など、60年代から70年代にかけて登場した数多くの女性アーティストたちが共通して抱いた、自分たちの性をめぐる過剰なまでの逼迫感が何に由来し、どのような実態をもつものであったのかを、今日において、またとりわけこうした西欧世界に属さない場において説明することが、困難を極めるといふ不思議な実情である。言わんとしていることは、女性の裸の肉体、そしてとりわけ永くタブー視されてきた女性の性器の「怒りをもった提示」が当時もっていた真の意味がわずか数十年のあいだに断絶していることである。この非伝承が起きたため、半世紀近い時間的距離と西欧世界に属さない地理的ギャップによって隔てられたわれわれの立つ位置からは、そのほとんどが理解しがたいものと映る。こうした意識のギャップはどのようにして起きたのであろうか。そして何が、性の解放運動とフェミニズムが本当に問題にしていたことを忘れさせるべく機能したのであろうか。

以上に紹介した女性アーティストらの身体パフォーマンスから共通して発散されるのは、それらが裸の肉体を提示し一見ポルノグラフィックにみえながら、じつはその対極にあるものを表現していることである。それは、ヴァリー・エクスポートが1969年におこなった有名なパフォーマンス『ジェニタル・パニック』が、ドイツ・ミュンヘンのポルノ映画館に乗り込んでおこなわれたものであったこと、そしてそこでは、ポルノの裸体には驚かない男性観客がエクスポートのパフォーマンスには、恐れをなして逃げ出したというエピソードからも

如実にうかがえることである。ここでは、こうした女性による当時のボディ・パフォーマンスが共通して内包していたアンチ・ポルノグラフィとしての意味を考えておく必要があるだろう。

みずからのセクシュアリティを否認されたうえ、それを表現するロゴスを奪われる伝統のなかで生きてきた女たちがとりうる手段としてシュニーマンをはじめとする女性アーティストらが定義したのが、ひたすら男性的視線による投影の最大のターゲットとされつづけてきたみずからの身体を逆手にとり、一見男性的視線の投影（＝命令）を忠実になぞるかに、つまり裸になった露わな肉体を提示する手段をとりながら、じつは投影（＝男性視線の命令）が自らの身体に到達するより前に、自ら男性的視線をみごとなまでに模倣する勝手な行動にでること、つまり、女性の性器を去勢された欠如とみなし男性のフェティッシュな命令に従う以外は独自のセクシュアリティなどをありえないとみなす男性的視線に向けて、メデューサのごとき独自の視線を投げ返すことであった。

16世紀以降の西欧世界において、一貫して女性のあるべき姿を規定してきた男性の投影的視線にしたがわない独自の（勝手な）行為を、シュニーマンは、すでに1960年代初頭以来、男性の**欲望**と**嫌悪**が激しくぶつかる性の識闘（しきいき）として規定したみずからの肉体をキャンヴァスに、表現しつづけてきた。しかしじつは、こうした投影する男性的視線を逆手にとる戦略をとった女性アーティストは、先に何人かの名を挙げたように、シュニーマン一人ではなく、後に美術界で名をなすようになる数々の女性アーティストたちもまた、手段や方向性には違いこそあれ、みずからの肉体を舞台に男性の投影的視線に対抗するボディ・パフォーマンスをおこなってきている。

60年代から70年代にかけて話題を呼んだドイツのレベッカ・ホルン、オーストリアのヴァリー・エクスポート、さらにその精神を受け継ぎ発展させたシンディ・シャーマンやマリーナ・アブラモヴィッチらは、すべてみずからの身体をキャンヴァスに見立て、男性的視線に対抗するパフォーマンスを行っている。さらには、シュニーマンと世代を同じくする西欧の女性アーティストらに混じって、1950年代末に海を渡った日本の草間彌生や久保田成子、ヨーコ・オノなど日本人の女性アーティストたちの活躍も目立っていた。ここにいくつか、西欧と日本の女性アーティストたちの作品のいくつかを紹介しておこう。[作品の提示]

実態の誤解を避けるべく整理しておく、60年代から70年代の若者たちが抱いた性に関する意識が、われわれが注目するアルプス北方ヨーロッパから北米アメリカにおいて、まったく受け継がれていないと言い切るのは完全に正しくはない。すでに誰がみても明らかなように、人間の肉体を消費可能な対象、すなわち商品としてあからさまに提示することは、あの性の解放運動時代以降、西欧世界をはじめ世界の多くの地域において、いわば当然のこととして広く浸透した。しかし、性の解放運動とフェミニズムの先駆的な役を果たした当時の女性アーティストたちが主眼としていたことは、身体の商品化だったのであろうか。答は明らかにノーである。それでは、彼女たちが自らの裸体をもっとも効果的な武器として動員することで成し遂げようとしていたことは何であったのであろうか。そして、再度問い掛けねばならないことは、どうしてそうした試みの中身が、今日ではこれほどまでに違和感をもって受けとめられ、理解が困難になってしまったのだろうか。

考えてみれば、すべてはほんの30〜40年ほどまえに起きたことである。しかしその間に、人間のセクシュアリティ、とりわけ、女性のセクシュアリティに対する抑圧こそが近代資本主義の隠された核心をなしていることを暴き出そうとする、そして正にそのために性を解放しようとした当時の若者たちが抱いた強い欲求は、いまや完全にその意味を失ってしまったかに思われる。あるいは、ここで大胆な推測を表明すれば、この偉大なる西欧に特有な抑圧構造を理解しようとする欲求は、とりわけあの「世界の文化地図」のなかで示された「法的規範」あるいはプロテスタントの支配する領域を除いた文化圏においては、当時を含め、そもそも正しく理解されることも具体的なものとして把握されることも、まったくなされていないまま今日に至っているかに思われる。

II. 理解不能となった性解放の必然性

1. 1960年代と現代の断絶はどこから来るのか？：Marina Abramovic & Valie Export の時代を経たパフォーマンス

1960年代から70年代にかけて西欧で性の解放運動が起きた意味、そしてフェミニズムの起点をなした女性アーティストらによる裸体と性器の「怒りをもった提示」を理解することは、今日では非西欧地域に生きる人間たちにとって難しいだけではない。いわゆる68年世代にとって性の解放がいかに逼迫した問題であったかということは、もはや同じ西欧人にとっても追体験がきわめて困難になっている事実は、2005年にマリーナ・アブラモヴィッチが35年あまり前にヴァリー・エクスポートがおこない話題を呼んだパフォーマンス『ジェニタル・パニック』(1969)をグッゲンハイム美術館で再現してみせた様子(映像)を目撃するなかから確認できる。[両パフォーマンスの提示]

性の解放運動が起きた必然性は、なぜに非西欧地域の人間たちには理解できないのか。そしてさらに、性の解放運動から半世紀近くがたとうとする現在、同じ西欧地域の人間にとっても、この運動がもった意味を追体験することが困難になってしまっているのはなぜか。西欧で起きた性の解放運動の必然性を理解するうえで障碍をなすこれら二つの壁を取り除くことが、これから講義で考えるべき作業の大筋をなしている。

2. 理由を知るための二段階からなる手続き

その解明は、二つの段階に分けて進められねばならない。二段階のうち前者は、性についてそして性とは何かを語る際に西欧と非西欧のあいだに根源的な違いが存在する事実に注目することから始まる。しかしこの作業は、ただ単に性の言説化をめぐり、西欧と非西欧のあいだには深刻な違いがあるという認識だけにとどまることを許さない。なぜならそれは、非西欧の人間が、西欧人にとって性が意味していたことを、まったく理解していない事実があるにもかかわらず、西欧から発信される性をめぐる様々な言説にとどまらず、それと密接に結びついた資本主義経済に支配される生き方をグローバル化の名のもとに、リアルタイムにいわば否応なしに受け入れている可能性が高いからである。

このような、起源への完璧なまでの無知のうえに立って、いまや世界全体が西欧のみに由来するきわめて独特な性観念と、それを基盤にしてこそ誕生しえ

た資本主義という経済活動を受け入れている奇妙な事実は何を意味し、またそれによって世界が現在どういう方向へ導かれているのかについては、いまだ全くといっていいほど解明が進んでいない。いや、そもそも以上に述べた認識さえ、いまだ世界の人々によって共有されないまま、経済のグローバル化だけが、もはや止めようのないまでのスピードで暴走しているのが現状である。

こうした事実気づく糸口として、講義の冒頭で示された世界の文化地図において、資本主義がもっとも発達し円滑に機能するとされる地域であるアルプス北方ヨーロッパと北米アメリカが、性の解放運動とフェミニズムがもっとも活発に起きた地域とほぼ重なっている事実を知ることが重要であった。この意外な符合は、資本主義の高度な発達と、それが世界に先駆けて実践された地域で性が言説化された有り様という二つの要素が密接な関係で結びついている可能性を示唆しており、その関係性の解明は、まさにアルプス北方ヨーロッパと北米アメリカにおいて性がどのようなかたちで言説化されてきたかの歴史を知ること通してなされるはずである。

したがって、西欧とそれ以外の地域における性の言説化をめぐる深刻な違いが存在することを確認したうえでとるべきつぎのステップは、西欧に特有な性の語られ方（言説化）がどのようなものであるか、それがいついかにして生まれ、資本主義の発展とどのように関係してきたかを、歴史を追って考えていくことである。ここまでその大筋を概観した第一段階に関する講義は、以上の手順に沿って進められることになる。

つぎに第二段階を概観しておきたい。この段階は、20世紀後半期に起きた性の解放運動の内容をとらえることをとおし、西欧近代における性をめぐる独特な言説化（性の科学）が、まさにこの時期に、西欧史上初めて大きく変容した可能性を考えることある。20世紀半ばが、資本主義の発展段階におけるもしかしたら最後の、少なくともきわめて大きな分岐点をなしていることは、疑いようがない。性をめぐってこの時期は、表面的には解放への強い欲求と直後に現れた性への無関心へと変遷をたどる。すべてをあからさまにすることとそれに引きつづく無関心の増大こそが、どうして性の解放が起きた必然性と女性の怒りをもった裸体と性器の提示が、今日では非西欧地域のみならず、西欧の若者たちにも理解されにくくなってしまったのかという疑問を解くうえで重要な意味をもって来る。ただ、当面この問題の理解にいたるには、性の解放運動がどのような前提条件のもとに起き、その成果はいかなるものであったのか、また

性の解放は、その後の時代にどのような変化をもたらしたのかを順を追ってとらえておく必要がある。

解放への衝動が無関心化する過程を説明する仮説としては、つぎのようなものが考えられる。それは、68年世代の性解放運動世代が、近代が抑圧してきた最後の砦であった性衝動の解放を旗印に運動を推し進めた結果、性衝動の解放自体が性衝動の形骸化したインフレーションを招き、その結果として性の世界を維持するために最も重要な官能性の弱体化をもたらしてしまった可能性である。このプロセスがどのように起きたのかについては、詳しく分析する必要があるが、その手順としては、性の解放運動を引き起こした前提条件を整理することから始め、さらには、H・マルクーゼが挙げる「性衝動に駆られた社会」が必然的にもたらすことになる官能性をそぎ落とした性の還元主義と性の情け容赦のない商品化が、結果として性にたいするアパシーを世の中に蔓延させていく過程をとらえる必要があるだろう。

これは、男女間の官能性が複雑に作用しあう場としてのセクシュアリティが、20世紀後半期の西欧において、まさに性の解放をとおし消滅した可能性を示唆している。その結果出現したのは、あからさまに単純化されたセックスだけが残る社会であり、それは、I・イリイチが「現代という時代を他のどの時代からも引き離す決定的な人類学的特徴」として規定する「ジェンダーのセックスへの解消」⁵とも言い替えられるものであろう。そしてこの「ジェンダーの喪失」、すなわち豊潤なジェンダーの単純で無味乾燥なセックスへの還元が地球全体の西欧化、言い替えれば資本主義経済体制のグローバル化にとって決定的に不可欠な条件であることも、イリイチは言い当ててくれている。

「西欧化した人間とは、ホモ・エコノミックスのことである。社会の諸制度が、地域社会から〈離床した〉商品生産に向けてつくり直され、商品生産がこうした存在の基本的ニーズに見合うようになったときに、この社会は〈西欧的〉と呼ばれるようになる」⁶

こうしてみると68年学生運動によって仕掛けられた性の解放は、一見すると

⁵ Ivan Illich, *Gender*, Berkley 1982, p.70. I・イリイチ著、玉野井芳郎訳、『ジェンダー』、岩波書店、1998年、143頁参照。

⁶ *Ibid.* p.10. イリイチ、前掲書、22頁参照。

矛盾するかにさえみえる二つの結果を、連続して引き起こすべく仕組まれていたものと考えられる。それはひとつには、永きにわたって西欧を支配しつづけてきた性を敵視する禁欲精神に画期的で決定的ともいいうる衰退をうながしておきながら、またほぼ同時に、まさに性を解放することをとおして、人間を動物とも機械とも異ならせる唯一の拠り所でもある性をめぐる豊かな官能性の世界を消滅させることにも決定的に貢献してしまったことを意味している。

20世紀半ば以降、西欧から世界中に発信されるかたちでますます社会に蔓延することになる官能性をそぎ落とされあからさまなセックスへ還元され商品化された性は、そもそも性に最も関心を抱くはずの若者層における性への無関心化を招くことになり、それによってやがては、性の解放運動が起きた意味そのものが、わずか数十年後には理解不能になってしまうという、振り返れば必然的な結果を招いた。ただここで繰り返し強調せざるをえないことは、このセクシュアリティのセックスへの還元こそが、ホモ・エコノミックスとイリイチが呼ぶアルプスの北方ヨーロッパで発生した資本主義を世界中に広めるうえで、絶対に避けては通れない必要条件をなしていたことである。

以上にみた二つの段階を経ることによってのみ、性の解放運動とフェミニズムが西欧の資本主義がもっとも発達した地域においてこそ起きるべくして起きた必然性と、21世紀に入ったいま、地球上の大半の人間が、その必然性をもはや理解し得なくなった真の理由の解明へ向けての筋道が示されるものと考えられる。今後の考察を導く指針として、ビタミンCの発見でも有名なノーベル賞生物学者、セント＝ジェルジ・アルベルトのつぎの言葉をひとまず掲げておこう。

「研究とは、すでに他のだれもが見たものを見て、だれも考えなかったことを考えることだ」⁷

3. 性愛の術 (ars erotica)と性の科学 (scientia sexualis)

そもそも西欧と非西欧地域における性の語られ方に大きな違いが存在していることについては、M・フーコーが「性愛の術」と「性の科学」という用語をも

⁷ Szent-Györgyi Albert 1893-1986 ハンガリー出身でアメリカ合衆国に移住した生化学者。1937年にビタミンCの発見などによりノーベル生理学医学賞を受賞。引用文は以下の本から引いた。バーバラ・オークレイ著、酒井武志訳、『悪の遺伝子』、イースト・プレス、2009年、73頁。

ちいて説明している。フーコーは、中国、日本、インド、古代ローマ、それにアラブ・イスラム文化圏といった西欧を除く地球上の大半の文化圏においては、性の真理を語る際に「性愛の術」が支配していたと規定し、これらの地域における性の言説化が、とりわけ快樂のとらえ方において、西欧のそれとは決定的に異なっていることを浮き彫りにしてくれている。これらの文化圏においては、「性にかかわる真理が快樂そのものから引き出される」⁸と考えられており、さらに「快樂は、許可と禁止を設定する絶対的な法（＝神的法則）との関連においてあるものとも、また効用性から引き出される価値基準に従うべきものとも考えられておらず、それは一義的にそして何にも増して快樂そのものとの関連においてとらえられているのである」⁹と説明される。ここで強調されているのは、まさにこの快樂においてこそ西欧と非西欧の性のとらえ方に決定的な違いがあるという点である。

非西欧文化圏における性をめぐる知恵（知識）は、「秘められたものでありつづけねばならない」。しかし性やそこからえられる快樂が隠されねばならない理由は、西欧においてあまりにも顕著であるように性が「その対象に取りつくやも知れぬ邪悪な要素をもっているからではなく、それをあからさまにしすぎてしまうと、その効果と美德が失われてしまうと語り継がれてきているがために、最大限の節制をもって取り扱われる必要がある」¹⁰と考えられているからなのである。

これに対し、フーコーがつぎに「性の科学」と名付ける西欧にのみ特有な性の言説化の仕方が、以上に説明された非西欧文化圏に共通している「性愛の術」とはあまりにもかけ離れたものであることは、いくら強調してもしすぎることはない。

4. 真実を知ろうとしない意志

16世紀以降の西欧近代においては、合理性と新たな科学への信奉を糧に真理を知ろうとする強力な意志が誕生する。そこからは、16世紀以降教会権力に代

⁸ Foucault, Michel, *The History of Sexuality: An Introduction Vol.I*, New York 1978, p.57. ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳、『性の歴史 I：知恵の意志』、新潮社、1986年、74-75頁参照。

⁹ Ibid. 同上参照。

¹⁰ Ibid. 同上参照。

わる世俗的な拠り所として、その後継続的に重要性を増していく科学的合理主義によって、それまで宗教的な霧に包まれていた自然や宇宙が、次々と解明され始める。そしてこの新たな世俗的信仰と化す科学万能主義の手によって、性もまた、自然と向き合うのと同じ姿勢で解明しうるはずだという考え方が進行した。こうした考え方を背景に、性もまた医学を中心とした科学の範疇から研究分析すべき対象だとみなされていく。これが先にフーコーが、地球上の他の大半の文化が性を扱う際にもちいる「性愛の術」にたいし、「性の科学」ということばで呼んでいたものである。ところがじつは、西欧人のおこなった科学的探究は、ひとたび対象が性となった途端に、きわめて奇妙なかたちで展開したことをフーコーは教えてくれる。¹¹

科学的合理主義によって貫かれていたはずの「性の科学」は、他の自然科学とは決定的な部分で異なっていたことがフーコーによって明らかにされる。その何よりも特異なこととして驚異をもって注目せざるを得ないことは、西欧で近代以降、つねに爆発的に増えつづける方向で進展する性に関する言説が、じつは、その限りなく増殖する性をめぐる言説が唯一目的としていることが、なんと「真実を語るのではなく、まさに性に関する真実が明るみに出ることを防ぐこと」であったことである。性をめぐる言説は、一見すると他の科学的と同様、真理を追究する知の姿勢と同じ方向で作用していたかにみえながら、じつはそれは、ひたすら真理を探究する姿勢とはまったく逆に、「非知への頑固な意志」によって貫かれていたというのである。そのために西欧の近代的人間は、「性を取り巻く周囲に、そして性をめぐって真実を創りだすための膨大な装置を築いておきながら、結局は最後の瞬間に、その真実はつねに覆い隠されねばならないもの」とみなしていたのである。¹²

われわれが焦点を当てる西欧におけるセクシュアリティは、ながいあいだ無条件に恐れられ憎まれる悪魔としての位置におかれてきた伝統がある。それは中世が終焉を迎えた16世紀以降は、科学合理主義の観点から追究され分析されるべきものへと転換したかにみえる。しかしこの一見科学的合理主義の範疇からとらえられるべきものとして位置づけられたかにみえるセクシュアリティは、うえにみたような「非知への頑強な意志」によって貫かれた「真実とセックスの相互的戯れ」とも呼びうる奇妙な科学といわざるをえないものであった。

¹¹ Ibid. pp.57-58. フーコー、同上、75-76 頁参照。

¹² Ibid. p.56. フーコー、同上、73 頁参照。

「このような言説が目的としていたことは、真理を打ち立てることではなく、まさにその真実が浮上することを妨げることにあった。[中略] 彼ら（西欧の男たち）は、セックスの周りにそしてセックスに関して、真実を算出するように見せかけながら、その最後の瞬間には真実を覆い隠すという巨大な装置を構築したのである」¹³

ではどうして西欧人は、近代という科学万能主義が浸透する時代に入ってから、性に関してだけは真実を語る振りをしながら、絶対にその解明を避ける行動をとったのだろうか？

5. 西欧だけが性を罪悪ととらえる文化であること

その理由を知るには、西欧に独特な性の言説化が、「性を敵視する禁欲の伝統」を基調とするセックスと女性に対する特異な態度によって染め上げられてきたことに目を向ける必要がある。イギリスの宗教学者、カレン・アームストロングは、性を敵視する西欧的特質について、つぎのように語っている。

「欧米のキリスト教社会には、セックスに対する嫌悪と恐怖が浸透している。男性は、セックスというものが何か邪悪なものであると教えられてきたので、彼らをこの危険な性衝動へと誘惑する女性を恐れ憎んできた。キリスト教は西洋の社会を形成してきたし、主要な宗教のなかで、セックスを嫌悪し恐怖するのはキリスト教だけであった。したがって、女性が嫌悪されてきたのは西洋だけであった。女性が劣等な所有物であるがゆえに支配されてきただけではなく、セクシュアルな存在なので嫌悪されてきたのは西洋においてだけであったからである」¹⁴

アームストロングが看破したキリスト教的原罪の観念を源泉にもつセックス

¹³ Foucault, op. cit., pp.55-56. フーコー、前掲書、72 頁参照。

¹⁴ Karen Armstrong, *The Gospel According to Woman: Christianity's Creation of the Sex War in the West*, New York 1986, p.2. カレン・アームストロング著、高尾利数訳、『キリスト教徒セックス戦争：西洋における女性観念の構造』、柏書房、1996 年、16-17 頁参照。

とその体現者と規定される女性に対するに憎悪と恐怖に貫かれた性観念は、16世紀以降西欧地域においては、フーコーが「性の科学」¹⁵ということばで言い表したように、科学合理主義がもつ知への意志という新たな近代的衣をまといながらも、きわめて特異なセクシュアリティの言説化という道を歩むことになる。

6. 罪を女性のセクシュアリティに押しつける言説化

これは、社会秩序を構成維持していくうえでの最大諸悪の根源と西欧の伝統のなかでみなされてきた女性とそのセクシュアリティが、近代の幕開け以降、女性とその性を恐れ憎悪するキリスト教的伝統を保ったまま、こんどは16世紀以降大きな信頼を勝ち得る科学と合理主義の名のもとに、想像を絶する執拗さで追い回され、徹底して消去されていく時代が到来したことを意味していた。そしてこの女性のセクシュアリティの消去こそが、資本主義の発展にとってまさに不可欠なものであったことに、重要な意味が存在する。近代の幕開け以降、資本主義の発展と表裏一体をなすかたちで進展する女性のセクシュアリティへの恐怖と憎悪を基調とする西欧独特な性の言説化（＝性の科学）は、その後もじつは今日に至るまで、西欧世界において生き続けているとみなすべきものである。

しかしひとたび西欧以外の地球上の地域に目を移すと、いうまでもなくそこでは、先にみたフーコーの分類法においてみられたように、セクシュアリティは一般に、隠され大切に育まれるべきもの、つまり「性の芸術」の伝統のなかにおかれてきたのである。このように、西欧と西欧以外の文化圏のあいだには、性、とりわけ女性のセクシュアリティをめぐる、強調しきれないほど大きな違いが存在する事実がここに判明する。そしてまさにこの事実こそが、われわれ非西欧地域に生きる人間たちに、西欧の近代資本主義の誕生とその後の発展にとって不可欠であった女性のセクシュアリティを世の中から消去していくプロセスがもつ意味を真に理解することを、ほとんど不可能ならしめているのである。

これまでに判明したのは、16世紀以降、西欧近代において定められたセクシュアリティの独特な方向性である。そしてまさに16世紀以降ほぼ5世紀近くにならって形成されてきた西欧世界の性をめぐる巨大な装置を打ち崩すべく 20

¹⁵ Foucault, op. cit., pp.57-58. フーコー、前掲書、74-75 頁参照。

世紀後半期の若者たちが起こした反抗運動が、セクシャル・レヴオリューションであったと、ひとまずは位置づけられる。

Ⅲ. 性の抑圧と資本主義の歴史的関係（1）

1. 資本主義の精神と女性的悦楽への嫌悪

前回の講義でそのアウトラインが設定された考察の第一段階、すなわち、性の解放運動がもった意味が、非西欧文化圏に暮らす人間には容易に理解し得ない理由をさらに詳しく解明していくことが今回の課題である。ただ先に進むまえに、これまで判明したことをひとまず確認しておこう。それらは、大きく分けてつぎの三つに分類される。

- 1) 地球上で西欧文化圏だけが 16 世紀以降、性を科学としてとらえる独特な言説化を進めた。しかしこれは、一見すると真理を客観的に解明するかにみえながら、最後のところで真実を隠してしまうという非知への意志に貫かれた奇妙な科学であった。
- 2) その原因は、西欧だけが性を罪悪ととらえる文化であることに由来する可能性が判明した。
- 3) 罪悪と位置づけられる性は、その担い手が女性であると決めつける伝統が西欧には存在し、とりわけ近代以降は、確立すべき社会秩序にとって障碍となる諸悪の根源を女性のセクシュアリティ（性的悦楽）に押しつけ、女性的なるものを消去する言説化が進行した。

以上の判明した点から、西欧の近代化が推し進められる際に、性をめぐり他の地球上の地域とはきわめて異質な言説化が進行し、それによって非西欧地域に生きる人間にとり、西欧における性のとらえ方がきわめて理解しがたくなった文化的構造がほぼ判明した。つぎに向き合わねばならないわれわれにとってより重要な課題は、この西欧に独特な性の言説化が、同じく 16 世紀西欧で誕生した近代資本主義とどう関係してきたか、という問題である。

西欧に固有な性の言説化と資本主義の発展が密接に関係していた可能性は、われわれが最初にみた世界の文化地図で示された事実、すなわち資本主義がもっとも円滑に機能するための前提が整った地域と、性の解放運動と女性の抗議運動が起きた地域が重なることによって示唆されていた。これら一見結びつきそうには思えない二つの事象のあいだにある関連性をつきとめるためには、前回までにつきとめられた西欧だけにみられる女性のセクシュアリティを消去す

る性の言説化が、16世紀以降いかに展開したのかをとらえることと、その発展形態が資本主義の発展とどう結びついていたのかを歴史的にたどる、という二つの段階からなるプロセスを推し進める必要があるだろう。これが今回の講義があつかうべき課題である。

性の言説化と資本主義のあいだに横たわる歴史的関係への扉を開くうえで、まずは世界の文化地図が示していた資本主義がもっとも円滑に機能する地域において、とりわけ16世紀以降顕在化した、一見すると相矛盾するかに思える二つの特性をたどっておく必要があるだろう。それらは、ひとつにはわれわれが注目するアルプス北方ヨーロッパならびに北米アメリカという地域が、マックス・ヴェーバーがいう「資本主義の精神」、すなわち、かのマルティン・ルターによって引き起こされた宗教改革の申し子であるプロテスタンティズムから、その発展形としてあるピューリタニズムがとりわけ浸透した結果、神の前で申し開きのできる勤勉を徹底すべくして生まれた職業倫理を糧に、資本主義経済が飛躍的に発展した地域として規定しうることである。これは、先の「文化の世界地図」において、「法的規範」の支配する地域が、プロテスタンティズムにその基盤をおいていると言い替えられていることにおいても裏づけられている。

二つ目の特性としてあげるべきは、魔女迫害、ロマン主義、母権制への憧憬、そしてヴィクトリア朝時代の婦人運動と、一見すると資本主義を支える合理主義的側面とは相性の良さそうにない現象が、やはり16世紀以降この同じ宗教改革とプロテスタンティズムが浸透した顕著にみられたことである。同じ地域で同じ時代に起きたこれら二つの現象が矛盾してみえるのは、資本主義を生みだす精神的基盤をなしたプロテスタンティズムや職業倫理、そしてピューリタニズムが、厳格できわめて男性的な印象を与えるのにたいし、魔女やロマンティックなもの、母権制や婦人運動などが女性に関わることであるように思えるからかもしれない。しかしこうした一連の「女性に関係した」現象（＝ふたつ目の特性）が、ひとつ目の特性である資本主義の精神と同じ源泉から生まれたものであることは、プロテスタンティズムからドイツ敬虔主義、ロマン主義、カルヴァニズムからピューリタニズムといった流れのすべてが、女性的な悦楽につながる要素を極端に憎み嫌う性格を共通してもっていた知ることから判明し始める。

2. 非知への意志と資本主義の密接な関係

フーコーが性の科学と呼んだ 16 世紀以降の西欧近代に独特な性の言説化の仕方が、一見すると真理を探究するかにみえながらじつは「非知」への頑強な意志に貫かれていたことの根源的な原因が、プロテスタント的な教えを基調づけていた厳格な禁欲の実現にあったことがここに判明しはじめる。つまり、宗教改革を起こしたルターが、天職 “the calling” を生む前提としたこの性的生活における厳しい節制（禁欲）の実践こそが、ヴェーバーも規定しているように、われわれが焦点を当てる「法的規範」の支配する地域において近代資本主義が誕生するうえで欠くことのできない要素だったのである。ここに西欧にのみ存在する非知への意志に貫かれた性の科学という性の奇妙な言説化が、資本主義の誕生とその発展にとって不可欠な要素であったことが判明する。

「近代資本主義の精神の、いやそれのみでなく、近代文化の本質的構成要素のひとつというべき、天職理念を土台とした合理的生活態度は [中略] キリスト教的禁欲の精神から生まれ出たのだった」¹⁶

3. 世俗化がもつ二面性からくる快楽敵視と女性憎悪の強化

16 世紀ドイツで起きた文字言語の男性による占有化と制度化と並んで、宗教改革によってもたらされた世俗化が内包していた互いに矛盾する二つ側面と、それらが互いに相俟って快楽敵視と女性憎悪を大きく増幅させたメカニズムについて次に述べねばならない。

世俗化の潮流は、一般にはしばしば教会離れが始まったことで人間が神の秩序に縛られない現世肯定主義的な世界観をかちえた証として語られるが、その内実をよくみると、一面ではたしかに（ローマ・カトリック）教会という制度

¹⁶ Max Weber, *Die protestantische Ethik und der “Geist” des Kapitalismus*, Textausgabe auf der Grundlage der ersten Fassung von 1904/05 mit einem Verzeichnis der wichtigsten Zusätze und Veränderungen aus der zweiten Fassung von 1920, Weinheim 2000, p.152. Max Weber, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, London & New York 2002, pp.122-123. マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳、『プロテスタンティズムと資本主義の精神』、岩波書店、1989年、363-364頁参照。

への信頼が薄らいだ徴候は顕著にみられるものの、とりわけわれわれが注目するプロテスタントの教えが強く浸透した北方ヨーロッパおよび北米アメリカ地域においては、神そのものへの信仰が弱まったことは意味していないことは、深く認識されるべきことである。いや、むしろそれは、教会という中間媒体を介在させることなく、個人が神と直接結びつくことを以前に増して厳格に強制したために、神による原罪を担う存在としての人間個々人への問い掛けが、それ以前の時代までとは打って変わって個人に対し強く直接的に作用することになった。

それによって近代的な個人は、自分がつねに神の監視下にあるという意識を、きわめて強く内面化するようになり、そのせいで個人が自己のそして周囲の人間の性的快樂に結びつく要素を、強迫観念に駆られたかのごとく監視し駆逐せねば気が済まない時代が到来したことを意味していた。

神と個人との関係の厳格化と表裏一体をなす世俗化を通して、神に代わる新たな近代人の生きる拠り所（＝信仰）として急速に信頼性を勝ち得る合理主義と科学至上主義が人びとのあいだできわめて重要な意味をもつようになったことは、よく知られた事実である。しかしこの16世紀以降に進行する世俗化が、古代ローマ以降の中世というヨーロッパ的秩序の制定者であったゲルマン人が元来もっていた要素である

- 1) 戦闘に勝つための快樂敵視と
- 2) 女性のになう呪術的な要素への畏敬の念から生まれた女性憎悪

という二つの要素を、一段と女性に特化したかたちで結びつけ強化する作用をもたらした可能性については、これまであまり語られていない。

4. 合理主義と科学至上主義から生まれた脱魔術化と魔女裁判の強化

16世紀以降の西欧社会に特徴的なのは、世俗化による信仰の厳格化の結果として個人に強く意識されるようになる性的快樂の自己管理とその徹底した駆逐を実践する手段として、世俗化を通し教会への信頼が揺らいだことにより新たな信頼を勝ち得ることになる個人の理性や合理主義、それによって飛躍的な進歩を遂げる医学（＝解剖学）を中心とした科学的知識と啓蒙主義が大きな役割を果たしたことである。

この時期以降は、中世の千年間を通しゲルマン的性格がキリスト教的倫理に

変容吸収されたものとして受け継がれてきた、①戦闘に勝利するために不可欠な快楽敵視と、②呪術的要素をになう女性への畏敬の念から生まれた女性への恐怖や憎悪が、近代的の幕開けとともに消滅するどころか、世俗化によって新たな信頼をかちえた合理主義と科学の力を借りることで、さらに一段と厳格に駆逐されねばならないとする考え方が支配的になっていく。

それは、敵視すべき快楽の体現者としての女性への憎悪がより合理的で科学的な禁欲の強化として顕在化してくる現象でもある。その現象を二つの方向性としてまとめると、次のようになる。

- 1) 社会から非合理的(=呪術的、神秘的)な女性的要素をことごとく排除していく脱魔術化(=啓蒙)の流れ。
- 2) 魔女迫害からヒステリー女の治療にいたる、科学とりわけ飛躍的進歩を遂げる医学(=解剖学)的知識を借りた女性的享楽の噴出の排除。

これら二つの要素は、これまた一見すると互いに矛盾するかにみえながら、この時代に必然的に現れたものであり、本来ヨーロッパ中世までの時代においてはゲルマン的な快楽敵視と女性恐怖(憎悪)にこそその起源をもつものであった二つの要素が、16世紀以降に特有なかたちで結びつくことによって社会のなかから女性的要素を消去し、それによって近代資本主義が円滑に機能する道筋をつけるうえで、このうえなく貢献したものと考えられる。

「世界の脱魔術化」という言葉を、16 西欧を表す表現として初めてもちいたのは、ヴェーバーである。これが、西欧人が誇る啓蒙の真の姿として規定されることは、テオドール・W・アドルノとマックス・ホルクハイマーが著した『啓蒙の弁証法』の冒頭にも記されているとおりである。

「古来、進歩的思想という、最も広い意味での啓蒙が追究してきた目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけるということであつた。しかるに、あますところなく啓蒙された地表は、いま、勝ち誇った凶兆に輝いている。啓蒙のプログラムは、世界を呪術から解放することであつた」¹⁷

¹⁷ Max Horkheimer/Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung*, Frankfurt am Main 1988, p.9. Max Horkheimer/Theodor W. Adorno, *Dialectic of Enlightenment*, New York 2002, p.3. マックス・ホルクハイマー／テオドール・W・アドルノ著、徳永恂訳、『啓蒙の弁証法』、

16世紀は、女性を忌むべき性の体現者とみなし、それ故に自己の享楽を自然に表明しようとする女性が魔女とみなされ、迫害の対象とされる傾向がにわかには強まった時代でもあった。15世紀以前までは、魔女裁判における女性被疑者の割合が50パーセント弱であったのに対し、16、17世紀のヨーロッパとアメリカで起きた魔女裁判では、訴追された80パーセントが女性であり、イギリス、スイスなどは90パーセントにまで上っていたという、西欧近代の幕開けを境目とした高率への変調が報告されている。¹⁸この原因としては、先にみたように16世紀に起きた宗教改革によって促進された宗教の世俗化によって、原罪への恐怖とそれに伴う禁欲への強迫観念が、市民社会の担い手として新たに誕生した〈個人〉の心に深く浸透し、それによって性的快楽の体現者とみなされてきた女性への恐怖と憎悪が急激に高まったことが考えられる。¹⁹

さらに、同じ16世紀に発明された印刷技術により、印刷された紙媒体を急速にヨーロッパ中に広めることが容易になった結果、とりわけ17世紀以降は、魔女によるむき出しの集団淫欲をあからさまに描いたサバトの光景などが、当時ドイツの画壇を席卷していたデューラーやその弟子らによって制作され、広く一般民衆に流布されたことも、敵視すべき性的快楽の体現者として女性を広く印象づけるうえで大きく貢献したものと考えられる。こうしたアルプス北方プロテスタント地域の画家が、明らかにルネサンスの影響を受けて描いた女性の裸体が意図的な醜悪さに満ちあふれていることは、同じ時代にイタリアのルネサンス画家から描いた女性の美しき裸体と比べると、あまりに対照的であることは特筆に値する。

それは、宗教改革による世俗的禁欲の強化、そのなかでとりわけプロテスタントの地域で定着していった魔女と悪魔の契約という考え方、世俗化の流れのなかで急速な進歩を始める解剖医学による女体検査への期待といった、宗教と科学が相俟って性的快楽への敵視を女性の性と同一視するようになる熱狂の始まりであった。²⁰

岩波書店、1990年、3頁参照。

¹⁸ Joseph Klaitz, *Servants of Satan. The Age of the Witch Hunts*. Indiana University Press 1985, pp.51-66. 上山安『魔女とキリスト教』（講談社、1998年）353頁参照。

¹⁹ Richard van Dülmen (hrsg.), *Entstehung des frühzeitlichen Europa 1500-1648*. Fischer Weltgeschichte Bd.24, Frankfurt am Main 1982, p.290-291. 上山安、前掲書、353頁参照。

²⁰ 上山安、前掲書、353-355頁参照。

IV. 性の抑圧と資本主義の歴史的関係（2）

5. 脱魔術化とロマン主義が示す不可思議な共謀関係

宗教改革がもたらした世俗化による個人の日常生活における禁欲の強化と、それがやがて性的快樂の担い手とみなされる女性への敵視へと発展していく過程と、ヴェーバーが、「あらゆる官能文化からの完璧な撤退(*grundsätzliche Abwendung von aller Sinnenkultur überhaupt*)²¹と表現し、のちに世界の「脱魔術化(*die Entzauberung/disenchantment*)」²²と言い替えたことで知られるようになった、科学と合理主義に信頼を寄せることで非合理的な神秘性や迷信的なものを極力排除していこうとするヨーロッパ近代を支配した社会的風潮とは、基本的には性格を同じくするものであろう。

しかしそこには、こうした近代社会を基調づける脱魔術化による合理化の行き過ぎに対し、反意と危機感を抱く反合理主義的な運動が、18 世後半期から 19 世紀初頭にかけて、あのルターと宗教改革を生んだドイツ語圏を中心に起きたこともまた知る必要がある。この脱魔術化に対抗する反合理性こそが今日ロマン主義と呼ばれる運動の核心をなす性格である。禁欲を強化し女性的快樂に繋がる要素を社会から排除するとともに、やはり女性的な要素と結びつく迷信・呪術的要素を取り除くことで、社会秩序を確固としたものにしていこうとする脱魔術化の時代的潮流にたいし、ロマン派の知識人は、科学合理主義の行き過ぎは、退屈きわまりない社会であり、そこにはニヒリズムしか残らないと唱えた。このようにしてみると、脱魔術化と、そのアンチテーゼとして同時代的に生まれたロマン主義とは、一見すると完全に逆方向のベクトルをもつかにみえる。ここでわれわれにとって問題になるのは、脱魔術化とロマン主義は、果たして本当に対立する関係にあったのであろうか、という点である。もしかしたら、この二つは近代化を推し進める目的で両者が互いに対立し合うかのごとき茶番劇を演じてみせただけなのかもしれない。

²¹ Weber, op. cit., p.62.

²² この世界の脱魔術化(*Entzauberung der Welt*)という表現は、マックス・ヴェーバーが使った用語として有名であるが、その起源に関しては、諸説があるだけでなく、ヴェーバー自身にしても、かならずしも最初からこのことばをもちいていたわけではない。有名な著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』においても、脱魔術化に言及した箇所は、すべて晩年になって加筆された部分であるという興味深い指摘がある。荒川敏彦「脱魔術化と再魔術化」社会思想史研究 No.26, 2002, p.49.

一見相対するかにみえる二つの潮流が、じつは互いを強化するかたちで近代社会のなかから女性的要素をさらに徹底して排除するうえで大いに貢献した可能性を探ることが、これからの課題となる。矛盾する二つの潮流を結ぶ鍵は、脱魔術化とロマン主義が女性的快樂にたいしみせた共通したスタンスに焦点を当てることによって、しだいに明らかになる。ロマン派が示す女性的快樂を排除する戦略は、脱魔術化の流れがみせた魔女迫害にみられるような直接的行動とは異なり、さらに巧妙なものだといえる。とりあえずいまの時点では、それをロマン主義がその内部に秘めていた女性の脱肉体化と呼んでおこう。

6. カトリック地域よりプロテスタント地域に強くみられるエロスへの嫌悪

脱魔術化とロマン主義の共謀関係を明らかにする作業にはいるまえに、まず確認しておかねばならないことがある。それは、脱魔術化にしてもロマン主義にしても、やはりそもそも本講義の冒頭で確認した「世界の文化地図」が示していた資本主義がもっとも円滑に機能する地域、すなわちヨーロッパのなかでもアルプス北方に特有な宗教が浸透した地域に限定された、あるいはすくなくともこの地域にとりわけ顕著にみられる問題である可能性である。人間生活のなかに現れる魔術的な、すなわち呪術性や女性的快樂につながる要素を徹底して社会から排除（＝消去）していく姿勢が、アルプス以南の地中海的風土を残すカトリック諸地域よりは、アルプス北方のプロテスタントからピューリタニズムが浸透した地域において、より顕著にみられたことを、ヴェーバーは以下のように記している。ただこの箇所は、その最晩年に発刊された第2版において加筆された箇所であることもまたあとで考慮する必要がある。（この部分は、それ以前の版には存在しない。すなわちそれは、ヴェーバーがもちいた言葉としてその後有名になる「脱魔術化」(Entzauberung)という語を、ヴェーバー自身が、その最晩年にいたるまで使用していなかった可能性を意味している。)

「世界の「脱魔術化」、すなわち救いの手段としての呪術を排除することは、カトリックの敬虔感情のばあいには、ピューリタニズムの宗教意識(それ以前ではユダヤ教のみ)のばあいのように徹底的にはおこな

われなかった」²³

ここで重要なことは、脱魔術化とロマン主義が巧妙に力を合わせた結果生まれる近代的な女性消去の構造にさらに考察を進める際に、ヴェーバーは、こうした現象が、資本主義の円滑な発展にとって不可欠な過程として規定する「世界の脱魔術化」が、アルプス北方のヨーロッパの、プロテスタンティズムの功利的禁欲をさらに発展させたピューリタニズム、そしてユダヤ教に注目し、その宗教的倫理観を、従来のカトリックの浸透した地域とは明白に区別しようとしている点である。顕著に観られたものである可能性をつねに視野に入れておく必要がある。

7. ピューリタニズムの核心をなす功利主義と魔術的（＝女性悦楽的）要素の排除

カルヴァンが唱えた予定説によって、プロテスタンティズムがさらに厳格化されるなかで、資本主義の近代的形態をととのえるうえできわめて重要な功利主義的な考え方が萌芽すると同時に、人びとのあいだには「内面的な孤独化」(“ein Gefühl einer unerhörten inneren Vereinsamung des einzelnen Individuums”)²⁴が進行する。この功利主義の徹底とますます孤独化する個人が、資本主義が浸透していく地域における二つの重要なメルクマールとなっていくことを知っておく必要があるだろう。

資本主義を支える職業倫理のもとをなす功利主義が、カルヴァニズムの倫理観において、「隣人愛」が非個人（人間）化され、職業的使命へと転換されることによって誕生したものであることをヴェーバーは記している。²⁵ ヴェーバーによれば、このきわめて特異な転換によってこそ、人間を取り巻く宇宙をひ

²³ ヴェーバー、前掲書、196頁。この下りは、1904年初版の文中にはみられない。今日ドイツ語の原文として確認できるのは以下の箇所である。

“Die ‘Entzauberung’ der Welt: die Ausschließung der Magie als Heilmittel, war in der katholischen Frömmigkeit nicht zu den Konsequenzen durchgeführt, wie in der puritanischen (und vor ihr nur in der jüdischen) Religiosität.” Weber, op. cit., p.185.

しかし、この部分は、1920第2版において加筆された箇所として記載されている。

²⁴ Weber, op. cit., p.62.

²⁵ Weber, op. cit., pp.66-68. ヴェーバー、前掲書、166-167頁参照。第2版において大幅に加筆された箇所有り。

とまず社会と同一視する考え方と、その宇宙（すなわちすべて）である社会のなかで、個人の事情を離れた（一義的に顧慮されないか無視される）職業的な義務の遂行が、絶対的使命となる、まさに資本主義を根底から支える功利主義的な義務感が誕生したというのである。²⁶

内面的な孤独化は、神への信頼を失った現代的個人に共通する徴候として資本主義が機能するために不可欠な要素である可能性が高いのだが、それによってカトリックの社会においてはまだ息づいていた魔術的（呪術的）要素が、徹底して排除されることになった経緯をヴェーバーは、最晩年に書き直された第2版のなかで、つぎのように説明している。

「このこと、すなわち（カルヴァニズムにおいて：著者注）教会や聖礼典による救済を完全に廃棄したということ（ルッタートゥムではこれはまだ十分に徹底されていない）こそが、カトリシズムと比較して、無条件に異なる決定的な点だ。世界を呪術（魔術）から解放するという宗教史上のあの偉大な過程、すなわち、古代ユダヤの預言者とともににはじまり、ギリシャの科学的思考と結合しつつ、救いのためのあらゆる呪術的方法を迷信とし邪悪として排除したあの呪術からの解放の過程は、ここに完結をみたのだった」²⁷

²⁶ “Die ‘Nächstenliebe’ äußert sich – da sie ja nur Dienst am Ruhme *Gottes*, nicht der *Kreatur* sein darf – in erster Linie in Erfüllung der durch die *lex naturae* gegebenen **Berufsaufgaben**, und sie nimmt dabei einen eigentümlich sachlich-*unpersönlichen* Charakter an, den eines Dienstes an der rationalen Gestaltung des uns umgebenden gesellschaftlichen *Kosmos*. Denn die wunderbar zweckvolle Gestaltung und Einrichtung dieses *Kosmos*, welcher ja nach der Offenbarung der Bibel und ebenso nach der natürlichen Einsicht augenscheinlich darauf zugeschnitten ist, dem ‘*Nutzen*’ des Menschengeschlechtes zu dienen, läßt die Arbeit im dienst dieses gesellschaftlichen Nutzens als *Gottes* Ruhm fördernd und also gettgewollt erkennen. [...] die Quelle des *utilitarischen* Charakters der calvinistischen Ethik liegt hier, und ebenso gehen wichtige **Eigentümlichkeiten** des calvinistischen Berufsbegriffes daraus hervor.” Weber, op. cit., pp.67-68

²⁷ ヴェーバー、前掲書、157頁。→1904/05年初版および1920年第二回改訂版においては、この箇所は、相当異なっている。“der absolute (im Luthertum noch keineswegs in allen Konsequenzen vollzogene) Fortfall kirchlich-*sakramentalen* Heils, war gegenüber dem Katholizismus das absolut Entscheidende. Jener große religionsgeschichtliche Prozeß der Entzauberung der Welt, welcher mit der altjüdischen Prophetie einsetzte und, im Verein mit dem hellenischen wissenschaftlichen Denken, alle magischen Mittel der Heilssuche als Aberglaube und Frevel verwarf, fand hier seinen Abschluß.” ちなみにこの文章は、ヴェーバーの初版にはまったく書かれていない。Weber, op. cit., p.178.

8. 「女性的官能性の排除」を「脱魔術化」と言い替えねばならなかった 20 世紀的問題

じつは、ここに「呪術からの解放の過程」と語られる箇所に関しては、引用した和文訳が依拠しているヴェーバー最晩年の 1920 年に発行された第二回改訂版と、1904/05 年初版とのあいだには、相当異なった表現がみられることを指摘しておく必要がある。初版のドイツ語原文をみると、そこには「呪術から解放」という表現はまだ見あたらない。かわりに、上記のピューリタニズムの本質を言い当てようとした箇所において、「それによってあらゆる悦楽(官能的)文化に対し根本的に背を向けること」(...und damit zur grundsätzlichen Abwendung von aller Sinnenkultur überhaupt)という表現がもちいられている。²⁸

この時点でヴェーバーは、ピューリタニズムがもっていた核心的な性格を、明らかに「あらゆる意味で官能性を嫌う文化」に見いだしていた。つまり、1904 年に『プロテスタンティズムと資本主義の精神』が初めて世に問われた時点では、脱魔術化や呪術からの解放といった表現はなく、そこには、女性的な官能性の拒絶こそが、近代資本主義を支えるピューリタニズム精神の核心にあったと主張されているのである。²⁹

「〈官能的文化〉への否定的な態度」(dies negative Verhältnis zur ‘Sinnenkultur’) という表現が、ヴェーバーにとってきわめて重要なキーワードであったことは、同じ箇所にもわざわざ注釈を付け、この〈官能文化〉にたいする否定的な態度こそが、「ピューリタニズム構成する重要な要素」(das konsitutive Element des Puritanismus)なのだと重ねて述べていることから推察される。³⁰

このあらゆる悦楽 (= 女性的官能) と情感に富んだ要素 (alle sinnlich-gefühlsmäßigen Elementen in der Kultur) と主観的な信仰 (subjective Religiosität) にたいし絶対的に否定的態度 (die absolut negative Stellung) を示すという、ピューリタニズムにおいてきわめて特徴的にみられる性格の原因を、初

²⁸ “Verbunden mit der schroffen Lehre von der unbedingten Gottferne und Wertlosigkeit alles rein Kreatürlichen erhält diese innere Isolierung des Menschen einerseits den Grund für die absolut negative Stellung des Puritanismus zu allen sinnlich-gefühlsmäßigen Elementen in der Kultur und subjektiven Religiosität ... und damit zur grundsätzlichen Abwendung von aller Sinnenkultur überhaupt.” Weber, *Die protestantische Ethik und der “Geist” des Kapitalismus*, op. cit., p.62.

²⁹ Ibid.

³⁰ Ibid.

版のヴェーバーは、ピューリタニズムがとりわけ強調する神との隔絶(Gottferne)と神に対しあらゆる純粋な被造物が無価値であるという感覚(Wertlosigkeit alles rein Kreatürlichen)と、そこから生まれる人間の内面的孤独化(diese innere Isolierung des Menschen)に見いだしている。ここにこそ、現代の資本主義を生みだしたピューリタンの精神が、いわば宿命的に女性的快楽を敵視する仕組みが説明されているのであり、これを晩年のヴェーバーが「脱魔術化」ということばによって言い替えたことは、かえって、資本主義の精神的支柱であるピューリタニズムにすり込まれた女性的官能の敵視という性格をカムフラージュする結果を生んだのかもしれない。³¹では、どうして晩年のヴェーバーが、その女性的な快楽にその源泉を見いだす表現から、より中立的ともいいうる印象で響く「脱魔術化」に変更したのかについては、1920年代ドイツの時代状況を考慮して再検討する必要がある。

ヴェーバーは1919年初頭に、ミュンヘンで「学問としての職業 Beruf zur Wissenschaft(学問に神が真に求めているもの)」と「政治としての職業 Beruf zur Politik(政治に神が真に求めているもの)」と題した有名な講演をおこなっている。第一次大戦に敗北した混乱期のドイツにおいては、社会の上から下にいた各階層を通じて様々な非合理的な救済の到来、すなわち「再魔術化 Wiederverzauberung」を期待し待ち望む風潮が強烈に吹き荒れていた。以上の二つの講演は、かつてのロマン主義運動を彷彿させる社会的風潮に、最晩年のヴェーバーが警鐘を鳴らそうとして行ったものとして知られている。

なかでもとりわけ彼が強く警告しようとしたことは、当時のドイツ社会に氾濫していた怪しげな講壇予言者 (Katherderpropheten)たちが、やがて政治の場にも影響をおよぼすことであった。これは当然ながら、やがて台頭するナチスを予測した警告とも読みとれる。しかし彼の警告は、当時のドイツ人聴衆の感情を逆撫でしただけで、彼はかえって激しい批判や非難、誹謗の嵐にさらされた。そして翌1920年に、ヴェーバーは亡くなっている。³²

「脱魔術化」という言葉を、第1次大戦後のドイツに吹き荒れる再魔術化の嵐に対抗しうるものとして、ヨーロッパ近代を特徴づける敢えて肯定的な特性として20世紀に蘇らせたヴェーバーは、脱魔術化による社会や人間生活の合理化の行き過ぎを危惧するロマン主義的心情からドイツを中心に生まれた再魔術

³¹ Ibid.

³² Rüdiger Safranski, *Romantik: Eine deutsche Affäre*, München 2007, p.331.

化がもつヌミノース³³な魔力を抑えこもうとするあまり、主著である『プロテスタンティズムと資本主義の精神』のなかで、かつては女性的官能性を排除する禁欲的性格として言い表していたピューリタニズムの核心的性格を、20世紀初頭のドイツ社会に吹き荒れた再魔術化を目指すロマン主義的風潮の復活に自制をうながしたいあまり、敢えて「脱魔術化」という言葉によって言い替えてしまいたかったのかもしれない。

しかしヴェーバーが敢えて「脱魔術化」という用語を再評価することによって警告しようとした魔術的なもの＝ロマン主義的なものの20世紀的復活は、そもそも脱魔術化、すなわち科学合理主義的精神の至上主義を生みだした核心に、女性的官能性を完璧なまでに消去していこうとするピューリタニ的な禁欲の厳格な実現があり、それはまた、ドイツのヌミノースな再魔術化を願望するロマン主義的な性格のなかにも、女性嫌い、すなわち女性の脱肉体化という女性的要素を消去しようとする性格として、しっかりと組み込まれていた。このことを思うと、科学合理主義を旗印とする脱魔術化と再魔術化を志向しているかに見えるロマン主義的性格は、表面上は対立ように見えながら、じつは女性的官能性の消去と女性の脱肉体化という、女性的性格を消去することを究極の目標としている点で、完璧なまでに結託しており、両者は互いを強化するなかで資本主義の新たな発展段階に貢献するからくりとして作用していた可能性が高い。問題なのは、むしろこうしたからくりが生まれたことで、女性を消去する近代的メカニズムの真の姿がますますカムフラージュされ、見えにくくなるという厄介な後遺症を残したことであろう。

20世紀初頭にみられたこの科学合理主義の推進とロマン主義的な再魔術化との対立劇は、あの第2次世界大戦後に生まれた68年学生運動と性の解放運動の性格をもまた、そのまま基調づけるものとなった。半世紀を経てまた再現されたこの女性消去にさらに貢献する茶番劇の姿をつぎに見てみたい。

³³ numinös: 聖的なもの-神的なものとの霊的な交渉において感じる恍惚と畏怖の感情。ドイツの神学者 Rudolf Otto(1869-1937) がその学説において Numinose という語をもちいたのが起源。

V. 性の解放を誘因した三要素

1. 科学合理主義（脱魔術化）とロマン主義（再魔術化）の 20 世紀的結託

前回の講義において、われわれは、ヴェーバーがその最晩年において、代表的著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に加えたある書き換えに注目した。そこで加筆修正された箇所がもつ意味は、近代資本主義の精神的支柱を、ヴェーバーが、当時台頭しつつあった大衆文化の非合理的言説への傾倒を目の当たりにして、ピューリタニズムの核心的性格を改めて敢えて強調したことにおいて重要だというだけでは許されない。じつは、ヴェーバーが警鐘を鳴らそうとした 20 世紀初頭のドイツを中心にみられた再魔術化の傾向は、16 世紀にルターの禁欲的精神から誕生した資本主義が、功利主義のさらなる徹底によってすべてをどん欲に商品化していく最初の徴候であったともみなせるのである。それは、19 世紀末までにおいて象徴界＝男性言語によって言説化するもののすべてを商品化する筋道がつけられたあとで、いよいよそれまで秩序から排除されてきた非合理性の砦、すなわち魔術的なものとその根源にある女性的官能性もまた、再魔術化という仮象を纏わせることで制御可能なものへと変換し大衆消費文化に呑み込ませることでこの世から完璧に消去してしまうという、資本主義が編み出したきわめて巧妙な手の内が初めてみられた点において、きわめて重要なのである。

問題となるヴェーバーの箇所をもういちど簡単に確認しておくおとつぎのようになる。1920 年に最終版が発刊されるまでヴェーバーは、ピューリタニズムの本質を説明した箇所において、「あらゆる官能文化からの完璧な撤退」³⁴という表現を用いていた。この官能文化(Sinnenkultur)という言葉には、多分にゲルマン時代からキリスト教的中世を経るなかで伝統として受け継がれ、さらに 16 世紀以降の宗教改革以降は、アルプス北方地域においてさらに厳格化されることになるあの禁欲が最大の敵とみなした性的快楽、とりわけその担い手である女性のセクシュアリティを取り巻く世界が包括的に意味されていたものと考えられる。つまりヴェーバーは、この官能文化、すなわち女性的な快楽を徹底して嫌いそれに背を向ける性格をピューリタニズムがもちえたことが、アルプス北方地域と北米アメリカに近代資本主義という機制を、世界に先駆けて誕生さ

³⁴ Weber, op. cit., p.62.

せる決定的な契機をなしたことを、明らかに看破していたのである。

重要なのは、ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をしたためた当初の時点において彼の頭のなかには、官能性すなわち女性的快樂を憎悪する伝統とその近代的増幅こそが資本主義誕生の引き金を引いたという思いが強くあったと推察されることである。しかし、第1次世界大戦敗戦後の混乱期にドイツ各地にキノコが繁殖するかのごとく現れた非合理的、神秘主義的な予言者やそうした合理性を取り払った場所に救済を待ち望む心情がドイツにおける大衆の幅広い階層に顕在化したことを目の当たりにした晩年のヴェーバーは、社会のなかから呪術的なもの、迷信的なもの、神秘的な非合理性を取り除いていく過程として進行した西欧の近代化にたいし、それは無味乾燥で退屈な世界しかもたらさないとして、合理的世界への拒絶反応として18世紀にドイツ語圏を中心に生まれたロマン主義的思考が、20世紀初頭のドイツに「再魔術化」を志向する徴候として復活したものとみなした。

こうした徴候のなかに、それまである程度の批判をも交えながら説明してきた近代資本主義を支える精神を根底から覆しかねない危険性を見抜いたかれは、こうした「再魔術化」への傾向に警鐘を鳴らし、それに歯止めをかける意味で、近代資本主義を支えてきたピューリタニズムの精神の根幹にあるものとして位置づけてきた、官能文化、すなわち女性的な性的快樂への拒絶感を強調することが得策ではない、と考えたことが想像される。つまり、20世紀初頭ドイツの社会状況のなかにおいては、もはや女性的官能文化の復活が資本主義を脅かしているのではなく、性的快樂を敵視する禁欲を強く内包する意味においては資本主義と同じ根本から生まれたものでありながら、資本主義を運営していくうえで欠かせない、科学合理主義や功利主義をこのうえなく憎むロマン主義こそが、資本主義社会を転覆させかねないという危険性を察知したのである。その理由から、当時進行しつつあった非合理主義や超越論を目指すロマン主義的(ヌミノース的)＝再魔術化的傾向に対抗する意味で、それまで主著のなかで官能文化への憎悪という内容で表現してきた箇所を、ことごとく「脱魔術化」という表現に書き換え、それこそが近代資本主義を支えてきた重要性なのだと説明しようとしたのではないだろうか。

したがってヴェーバーがおこなった「官能文化＝女性的快樂からの完璧なまでの撤退」から「脱魔術化」への書き換えは、けっして両者が同じ意味をもつものと理解すべきではない。科学合理主義と人間の個人的事情を離脱した功利

主義こそが資本主義の精神の根底にあり、それを実現するキーワードとして世界の脱魔術化を敢えて強調したのは、うえにみたように、20世紀初頭のドイツにみられた聖的、神的、靈的な超越的非合理主義、すなわちかのロマン主義的伝統が復活しつつある傾向への強い危機感があったからこそであった。つまりヴェーバーは、こうした「再魔術化」の傾向に対抗し、資本主義の精神とその重要性をあらためて確認する意味で「脱魔術化」の重要性を語ったのである。

だとすれば、ここにはそもそも対抗すべき敵の転換という重要な現象が起きていることに気づく。脱魔術化が対抗すべき20世紀初頭の再魔術化、すなわちネオ・ロマン主義的傾向には、すでに確認したように、ピューリタニズムのもつ禁欲精神が本来的に嫌ってきた女性的快樂によって覆われた官能文化はもう含まれていない。いや、それどころか、そもそもロマン主義には、最初から女性の脱肉体化という女性的官能性を、いわば腑抜けにってしまうきわめて頑強な女性憎悪と女性敵視の性格が組み込まれていたはずである。

つまりここに明確化することは、女性的官能性の排除こそを究極の目的とするという意味においては、科学合理主義と功利主義を生み出すことで資本主義を支えたピューリタニズムも、そうした科学合理主義と功利主義が生み出す非人間化され無味乾燥で退屈な近代社会への拒絶反応として生まれたロマン主義も、女性的官能性を徹底して消し去ることを目指すものであるという意味においては、完璧なまでに方向性を同じくしているのである。

一見すると互いに相対するかにみえるこの二つの精神が、じつは奇妙に結託しうることを証明したのが、20世紀前半期のナチスの台頭からその崩壊をめぐるドイツの歴史であった。ただこの間も女性的官能性の排除は、その巧妙な手口を強化しながら、一貫して推し進められたとみなすべきであろう。

そしてわれわれが注目する20世紀後半期の性解放の時代である。1960年代後半期にその高まりをみせた学生運動は、20世紀初頭と並んで、資本主義を再びその根底から批判しようとした。ただその際、資本主義の精神的基盤をなしてきた科学合理主義と功利主義については、その批判の矛先が曖昧になる。たしかに68年学生運動のなかには、多分にロマン主義的な傾向がみいだせる。またそのなかでわれわれにとって見逃しがたい傾向としては、資本主義がもたらす非人間的生産構造への批判を持ちだしながら、そうした現実原則が風靡する社会への対抗策として、資本主義の精神とロマン主義の双方を支えてきた禁欲、すなわち快樂原則を抑圧することへの強い抵抗を示したことが挙げられよう。

たしかに性的抑圧の解放を運動の中心に据えたことが、18世紀末のロマン主義や、20世紀初頭ドイツの自然回帰運動といった従来の若者運動とは大きく異なっていた点だといえよう。20世紀後半期の若者運動をとらえる際に、性の解放を中心的テーマとしてみなさざるをえない必然性が、ここに存在する。

ただそれでは、この性の解放運動は、それまでピューリタニズムとロマン主義の双方が抑圧してきた官能文化＝女性のセクシュアリティを復活させる役割を果たしたのだろうか、あるいはそもそもそれを目指していたのだろうか。性の解放と女性的官能の世界の復活との関係を解き明かすことが、これから考えていかねばならない中心的課題である。

しかしまずは、そうした20世紀後半期に性の解放運動が発生しえた受け皿、つまりその社会状況を捉えておく必要があるだろう。

2. 性の解放運動を準備した三つの要素

そもそも性の解放運動を引き起こした要因としては、どのようなものが考えられるのだろうか？

① ベビーブーム世代 [第一の要因]

60年代後半の西欧社会が、戦後ベビーブーム世代が思春期を迎える時期と重なっていた事実には無視しがたいものがある。そもそもベビーブーム世代ということばはアメリカで生まれたもので、通常1946年から1964年(1946~1964)にかけて生まれた世代を指してもちいられる³⁵。

戦争終結の喜びもつかの間、冷戦構造による新たな世界戦争への恐怖に包まれていったこの時代に、高い出生率に湧いた欧米先進工業国で生まれた子どもの多くが、60年代後半から70年代にかけてティーンエイジャーとなり、やがて結婚適齢期を迎えていく。³⁶この世代に先立つ、いわゆるサイレント・ジェ

³⁵ Howard Smead, *Don't Trust Anyone Over Thirty: A History of the Baby Boom*, San Jose/New York/Lincoln/Shanghai 2000, p.XV. こうした一般認識とはやや異なり、ハウ／ストロースのように、出生数の高い時期よりは同じ意識を共有する世代という面から1943年から1960年までに生まれたものをベビーブーム世代と分類する説もある。Neil Howe & William Strauss, *Generations: The History of America's Future 1584 to 2069*, William Morrow 1992, p.8.

³⁶ 【ドイツの場合】同じ時期におけるドイツの出生率（人口1000人あたり生きて生まれた子どもの数）をみると、旧西ドイツ地域において1950年に16.2、1960年に17.4と、1998年の10.2と比べ圧倒的に高いことが分かる。合計特殊出生率（15歳から49

ネレーション（1925~1945 年生れ）や後のジェネレーション X（1965~1981 年生れ）などと比べても顕著に高い人口比率を占めていたベビーブーム世代³⁷が思春期を迎えた時期と性の解放運動の時代が重なっている事実は、けっして偶然とはいえない。「多くの点において 60 年代の性革命は、人口学的かつ生理学的なエネルギーに起因している」³⁸とするデヴィッド・アリンの見解は、こうした事実を踏まえたものだといえよう。「カウンター・カルチャーや抵抗運動、それにアクティヴィズムのほとんどとまではいわずともかなりの部分を突き動かしていたエネルギーは、たんに若い子らのセックスをしたい衝動からなっていた」³⁹と、かつてのあるヒッピーが証言するように、性の解放をもたらした

歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に子どもを産むとした場合の平均子ども数）でも、旧西ドイツ地域における 1950 年の数値が 2.19、1960 年が 2.35 と、1998 年の 1.41 と比べ格段に高く、やはりドイツにおいてもベビーブーム世代の人口が多いことが分かる。Bernhard Schäfers/Wolfgang Zapf(Hg.), *Handwörterbuch zur Gesellschaft Deutschlands; 2., erweiterte und revidierte Auflage*. Leverkusen 2000, p.80.

【日本の場合】日本においては、出生率調査が戦後初めておこなわれた 1947 年から 1949 年（あるいは 1950 年）までの期間を「第一次ベビーブーム」と呼んでおり、1949 年の合計特殊出生率 4.32 という数値が示すように、この期間に生まれた子どもの数が、その前後と比べ格段に多いのが特徴である。ちなみに 1949 年の出生数は 269 万 6638 人で、日本の出生数としては、未だ史上最多数を記録している。これは、2007 年の出生数 106 万 2604 人の約 2.5 倍である。この期間に生まれた世代を「団塊の世代」とも呼ぶ。

すでに 1950 年以降出生率は急速に低下を始め、1950 年代半ばには 2 をやや超えるまで下がり、1996 年には 1.41 と、人口を維持するのに必要な水準（人口置換水準）である 2.18 を大きく割り込むという傾向を示している。厚生労働白書（厚生労働省／監修、平成 13 年版）248 頁。

【日本に特徴的な第 2 次ベビーブーム】日本において今ひとつ特徴的なのは、1970 年代前半期に、二度目の人口急増期（ベビーブーム）が訪れることである。ちなみに 1973 年の出生数は 209 万 1983 人で、この時期のピークを迎える。この第二次ベビーブームは、1971 年から 1974 年にかけて生まれた約 800 万人を指し、これを「団塊ジュニア」と呼ぶこともある。

³⁷ Howard Smead は、アメリカにおけるベビーブーム世代の総数を 7600 万人で、それは先立つサイレント・ジェネレーション（1925~1945 年生まれ）と比べて約 1700 万人も多かったとしている。ベビーブーム初年度の出生数だけみても、340 万人と過去最高を記録したのだが、それはさらに急激な上昇をつづけ、1957 年の 430 万人によってピークに達する。ベビーブーム世代の総数は、その多くが中高年を迎えようとする 90 年代後半期においてもアメリカ合衆国の総人口の三割近くを占めるとしている。

Smead, op. cit., p. xv-xvi.

³⁸ David Allyn, *Make Love, Not War The Sexual Revolution: An Unfettered History*. New York 2000, p.196.

³⁹ Ibid. p.196.

様々な要因を検討する前に、まずはとにかく 60 年代後半が、西欧先進諸国において、セックスの相手を強く求める世代が他の人口層を圧倒する、いわばリビドー過負担が起きていた時期であったことを知っておく必要があるだろう。

② ピルの出現 [第二の要因]

【ピル解禁への流れ】

1951 年以降：発展途上国の人口抑制策として開発

1957 年：月経不順の治療薬としてアメリカで認可

1960 年：避妊薬としてアメリカで認可

二つ目の下地は、ピル⁴⁰の出現という医学テクノロジーの成果に起因する。西欧の 60 年代はピル（経口避妊薬）の解禁とともに始まったといっても過言ではない。ウィーン生まれで 1939 年にナチ政権を逃れアメリカに渡った化学合成学者カール・ジェラッシ(Carl Djerassi 1923- ウィーン生まれ)が 1951 年に化学的合成に成功した経口避妊薬は、その後世界保健機構(WHO)の後援などのもとタイ、プエルト・リコ、メキシコ、アメリカなどで臨床実験が重ねられ、同時に開発を進めていたアメリカの内分泌学者グレゴリー・ピンカス(Gregory Pincus)らの協力も得て、1957 年にまず月経不順の治療薬として認可される。しかしそれは、1960 年にアメリカ食品医薬品局が避妊薬として正式に認可するや、あっという間にアメリカ全土に広まった。この時期アメリカの大半の州では依然として中絶が非合法であり、信頼性の高い避妊法への要望が強かったこと、性器注入方式の避妊などに比べ経口投与できる簡便さなどが、キリスト教的伝統が障害になるという当初の予想に反し、ピルが幅広い層から歓迎された理

⁴⁰ 今日ピル（経口避妊薬）は、英語では一般に combined oral contraceptive pill (cocp) と呼ばれている。

ちなみに日本においては、経口避妊薬は日本医学界の協力の反対のもと、1999 年まで欧米での認可後も 40 年近くにわたって禁止されてきた。その主な理由は二つに分けられる。ひとつ目は、ピルを長期間服用した際の副作用が懸念される〈第 1 の理由〉というもの。もうひとつは、ピルを認可するとコンドームによる避妊率が下がり、それによって性交渉に起因する感染症が増える可能性が高い〈第 2 の理由〉というものであった。実際 2004 年の時点においても、日本人の避妊方法の 80 パーセントはコンドームによるもので、今日では、これが日本におけるエイズ発生率の比較的低い要因になっているともされている。経口避妊薬は、1999 年に公認されたが、政府はピルを使用する女性に三ヶ月おきに医者への検診を受けるよう奨励している。これは欧米の女性たちが、半年ごとか年に一度程度医師の検査を受けるのが通例であるのと比べると頻度が高い。

由だとされる。

西ヨーロッパ諸国においても状況は似かよっていた。⁴¹西ドイツでは、1961年にベルリンのシェーリング社(Schering AG)が、「アノヴラル(Anovlar)」という商品名で経口避妊薬の発売を開始した。ドイツにおいてもやはり当初は、未婚の女は婚前性交渉をもつべきではないので避妊薬は必要としないはずだし、また既婚の場合はできるだけ多くの子を産むべきなので、やはり必要ないはずだとするキリスト教的倫理観が表向きは支配していたため、避妊について公然と議論することは社会的タブーであった。したがってシェーリング社もアメリカでの導入時と同様、表向きは「生理不順を改善するための処方」としてピルの販売を開始せざるを得なかった。しかしそれも、わずか一年後には保守派政治家や教会関係者らの警告をよそに圧倒的な需要におされ、合法的な避妊薬として西ドイツ全土に浸透していった。ちなみに旧東ドイツにおいても、1965年には人民所有企業イエーナファーム(VEB Jenapharm)によってオヴォジストン(Ovosiston)という商品名でピルが認可されている。

3. ピルが西欧世界にもたらした歴史的な変化

ピルという医学テクノロジーの成果が、当初期待されたように人口増加の制限が望まれる発展途上国においてではなく、まず西欧先進工業国で爆発的に浸透した事実は、かつてフーコーが、セックスにおける「不毛な活動を否定し、的外れの快楽を追放し、生殖を目的としない行動を減少あるいは排除」することで「人口の増殖を保証し、労働力を再生産し、社会的関係をそのままの形で更新する」⁴²ことを国是としてきたと語る西欧諸国の近代化の大前提に、かつて経験したことの無い決定的な変化がもたらされたことを意味していた。

なぜならピルという手段は、つぎに確認する三つ目の性解放を準備した時代的下地と補完関係にありながら、西欧を長いあいだ支配してきた性を恐れ敵視する風潮が急速にすたれる傾向と並行して、しかしそうした衰退現象とは対照的に、再びフーコーのことばを引き合いにだすと、まさに資本主義の拡大(＝グローバル化)にとって不可欠に機能する性的欲望を動員する装置の暴走を文字どおり可能にするカンフル剤として機能した可能性が高いからである。

⁴¹ スペインやイタリアといったカトリック色の強い国においては、教会側からの抵抗によりピルの認可は、他の欧州諸国より数年遅れている。

⁴² Foucault, op. cit., pp.36-37. フーコー、前掲書、47頁参照。

ピルによって西欧世界の人間たちは文字通り歴史上初めて、近代以降つねに否定的な意味ではありながら爆発的に言説化されてきた性に関する「不毛な活動」や「的外れの快樂」という禁じられた世界への好奇心を、妊娠を怖れることなしに満たす切符を手にしたのだと、ひとまず言うておこう。

4. ピルの出現に伴う人口の急激な減少

ここで、この時期以降とりわけドイツ人で広く口にされるようになった「ピレンクニック(Pillenknick)」という流行語を紹介しておく必要があるだろう。意味しているのは、広く西欧諸国において1960年代に顕著にみられた出生率の急激な後退であり、その原因がピルにあるとされる。それは、ピルの導入を境に出生率がガックリと「折れ曲がった」からである。具体的にみると、旧西ドイツにおいては、1955年から1965年にかけて急激な出生率の増加がみられ、それがベビーブームと呼ばれる時期である。この出生率の増加は、1963年の18.3（人口1000人あたりの生存出生数）をもってピークに達する。

しかしその年は同時に出生率が急降下する始まりでもあった。以降ドイツ人の出生率は一貫して減少し、1978年には9.4にまで下がる。これは、ピルが合法化されてからわずか15年ほどの間に、出生率が文字通り50パーセント近く減少したことを物語っている。とりわけ70年代半ばにおける出生率の減少はメディア報道などをとおして広く大衆に浸透した結果、「ドイツ人は近い将来滅亡するのか」という危機感がまことしやかに叫ばれたものである。⁴³

医学的観点からみると、出生率が後退した責任をピルの普及のみに押しつけるのは神話でしかないとされる。⁴⁴たしかに西欧諸国の人口状態は、すでに20世紀初頭から全般的な減少傾向にあった。さらに、出生率の変動にはつねに社会文化的な複合要素が絡んでいること、とりわけ60年代以降は、女性の高度教育、職場への進出がかつてない規模で進み、それに起因する婚期の遅れなども、出生率を低下させた要因として考慮されねばならないであろう。ただここで重要なのは、ピルが出生率低下の真の原因であったか否かではなく、ピルの存在が大衆にもたらしたセックスや男女の関係をめぐり新しく生まれたイメージと、それが性の関係にもたらした変容の可能性である。すでにみたとおり、人口比

⁴³ Keldenich, Beate. *Die Geschichte der Antibabypille von 1960 bis 2000. Ihre Entwicklung, Verwendung und Bedeutung im Spiegel zweier medizinischer Fachzeitschriften: "Zentralblatt der Gynäkologie" und "Lancet"*. Aachen 2002, p.103.

⁴⁴ Ibid. p.104.

において圧倒的な数を占めるベビーブーム世代が結婚適齢期を迎えると同時に、性の解放が西欧史上かつて例をみなく進展する時代に出生率が激減している事実は、ピルの発明とその浸透によって社会に広められたイメージが、すくなくとも西欧の人びとに従来の伝統とは異なる自由な性的行動への幻想を抱かせたことは否みがたい事実であろう。

ピルそのものが、西欧人の性的活動を活性化させたことを学問的に裏づける証拠がないかわりに、60年代以降は、いわゆるセックスにおける「遅れを取り戻したい」欲求が若者にかぎらず、社会全般にわたって広く認められたことが報告されている。それは、「パートナーの交換、バカンスでの恋、職場での情事、あるいは若い娘に乗り換えることによる糟糠の妻との関係の〈解消〉」といったかたちであらわれたとされる。⁴⁵1972年の調査によると、性的に活発な若い女の四分の三が、まったくかきわめて希にしか避妊の措置を講じていないと答えていることも、ピルそのものよりもピルが大衆にもたらした開放的な幻想の方が、実際には重要な役をはたしている可能性が高い。⁴⁶

5. 女性解放運動にピルが果たした影響

ただまた一方では、ピルが果たした役割を単に幻想の流布にだけ帰結させることも完全に正しいとはいえない。とりわけ70年代から80年代にかけて大きな高まりをみせるフェミニズム運動にピルが果たした役割には、決定的なものがあつたとする説が多くみられる。

「新しい女性運動も、ピルの存在なしには考えられないものだった。ピルによって女たちが自立し、自分たちの性的欲望について考えをめぐらし、自己を規定していくことができるようになった事実なしには、フェミニズム運動の存在はありえないのである。それまでの女たちは、男に完全に依存していたのだから」⁴⁷

ピルが女たちに与えた影響については、必ずしも肯定的とばかりはいえない複雑な面もある。つまり多くの女たちが、ピルを使用することになってから自

⁴⁵ Ibid. p.111.

⁴⁶ Ibid. p.112.

⁴⁷ Ibid.

分をより自由で幸福だと感じる一方で、当時は含有量が高かったホルモンによる副作用で体の不調を訴える、あるいはその不安を感じるといったマイナス面も生じていた。また、ピルによる性的な自由と自立が、必ずしもより多くセックスをしたいという性欲の増大にはつながっていないという報告もある。⁴⁸

ピルの使用が、女をつねにセックス可能な状況におくことで、かえって自由を縛る側面もあったという報告もある。つまり以前であれば、妊娠の危険を理由に男の欲求を延滞させたり拒否したりすることが可能であったのが、ピルを使用していることによって、いいわけが成り立たなくなったというのである。⁴⁹ こうしたピルがもたらしたさまざまな面を考慮したうえでも、その存在が 60 年代以降の女たちに画期的な意味をもったことは、つぎのある女性のことばによって端的にまとめられるであろう。

「ピルが 60 年代にどれほど解放的な作用をおよぼしたかは、あまりにも簡単に忘れ去れている。私たちの生きた世紀において、ピルほど女の生きることに直接の影響を与えたものはない。それはおそらく、参政権の獲得さえも上回る出来事であった。[中略]ピルによって、性の関係をめぐる新たな試みを実践にうつすことができるようになり、それは男女の関係をよりオープンなものにした。子どもの出産を遅らせることが可能になったおかげで、仕事について真剣に考えられようになった。そしてピルは、フェミニズムと新しい女性運動の点火剤となった。自己の肉体に責任をもてると感じられるようになることで初めて、女たちは、夫や父、上司や医者や教会の権威を疑問視できるようになったのである」⁵⁰

6. 性表現の解放 [第三の要因]

⁴⁸1978 年から 1981 年にかけて実施された調査によると、ピルによってセックスをする際に以前のように身構える必要がなく気楽になったと答えた女たちが 77.7%にのぼったのに対し、オルガスムスに達しやすくなったと答えたのが 33.1%、性交の回数が増えたと答えたのが 31.9%、性欲が高まったと答えたのが 17.6%と、以前に比べ格段に低下したとされている。Ibid. p.115.

⁴⁹ Ibid.

⁵⁰ Ibid. p.118.

三番目にあげねばならないのは、この時期に起きた性表現の解放⁵¹（言語化される性の領域を飛躍的に押し広げ、長いあいだ西欧世界を支配してきた性への恐怖心や警戒心＝女性恐怖と快楽敵視の伝統を解除するうえで、文学が果たした役割）である。ここで目撃されるのは、すでに紹介したフーコーの表現にしたがえば、かのカトリック司教要綱以来、3世紀近く西欧社会を律してきた嫌悪と猜疑心に塗り固められたセックスにたいする態度、すなわちこのおぞましきものとして罪悪視されてきた性をめぐる、ありとあらゆる様相や相関関係、その作用を「枝葉末節に至るまでとことん追求」⁵²しなければ気が済まない過剰な警戒心が、突如として弱まり消滅していく過程である。それは、50年代末から60年代初頭にかけて、高名な文学作品における性描写が、当局の取り締まりをなし崩し的に圧倒し、その結果を大衆が肯定的に受け入れることで、性表現の氾濫が日常化していった時期としても位置づけられる。

1950年代末から60年代かけては、性表現をテーマにした文学作品が検閲の圧力からつぎつぎと勝訴していった時代であった。そうした性表現が解放されていく流れを、ここで概観しておくことにしよう。

火蓋を切ったのは、30年代以来当局からの再三にわたる検閲、没収、逮捕にさらされてきたD・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』⁵³であった。この作品の無削除版は、1959年にアメリカで初めて出版されたのだが、この時期に

⁵¹ 後にいわゆる「ポルノ解禁」と呼ばれるようになる現象。

⁵² Foucault, op. cit., p.19.

⁵³ David Herbert Lawrence (1885~1930), *Lady Chatterley's Lover* (1928): この作品はロレンスの死から2年を経た1932年に出版（クノップ版 Knopf）されたが、それは作家の性愛的表現をすべて削除したいわば「去勢された」ものであった。1944年にはダイヤル・プレス社(Dial Press)が、性的描写のある箇所をいくらか盛り込んだかたちで出版したが、ニューヨーク悪徳書禁止協会によって、ただちに400部が没収された。その後も作品の一部を出版する試みは幾度かあったものの、それらはすべて起訴か逮捕につながっていった。Allyn, David, *Make Love, Not War – The Sexual Revolution: An Unfettered History*. New York 2000, p.311.

ちなみに日本においては、伊藤整訳の『チャタレイ夫人の恋人』の完全版が、1950年4月に刊行されている。作品は警察当局の取り締まり対象となり、二か月後には「出版社の倉庫からばかりでなく全国の小売店の店頭からも押された」とある。以降この作品をめぐる訴訟は「チャタレイ裁判」として話題を呼び、1957年3月に最高裁において有罪の判決が出ている。

またイギリスにおいては、アメリカに遅れることわずか一年後の1960年に、ペンギン・ブックス社が裁判に勝訴している。伊藤礼「改訂版へのあとがき」、『完訳 チャタレイ夫人の恋人』（伊藤 整訳、新潮文庫、1996年）564-568頁。

においてもこの小説の出版が勇気を要するものであったことは、出版を手がけたグローヴ・プレス社が当初通信販売したところ、発送のわずか二日後には 164 部が郵政省により没収されたことにもあらわれている。しかし時代の風はすでに性的表現の解放を求める方向へと転じていた。裁判の結果連邦側は敗訴し、四か月後には、グローヴ・プレス版『チャタレイ夫人の恋人』は 16 万 1000 部を売り、ニューヨーク・タイムズ誌のベストセラーリスト二位まで駆け上がっていた。⁵⁴

しかし、当局はまだ性言説の監督者たる権利を放棄したわけではなかった。『チャタレイ夫人の恋人』の成功から二年後、こんどはヘンリー・ミラーの『北回帰線』⁵⁵が刊行され話題を呼んだ。ミラーのこの小説は、1934 年にパリで出版されて以来、アメリカでは一貫して発禁あつかいにされてきたものである。1961 年 6 月に『北回帰線』の無削除版が発売されるや、警察はすぐさま摘発にのりだし、ニュージャージー州だけでも 28 名にもものぼる書店経営者が逮捕されたとされる。以後発行元のグローヴ・プレス社を経営するバーニー・ロセットは、この本一冊のために 60 もの訴訟にさらされている。判決は州ごとに分かれ混乱を呼んだが、1964 年 6 月の最高裁における判決により『北回帰線』の合法性が確定した。⁵⁶

ひきつづき 1964 年には、1820 年代来発禁処分にされてきた古典的ポルノグラフィ『ファニー・ヒル』⁵⁷が出版され、すぐさまマサチューセッツ州が没収にのりだし訴訟が開始された。この裁判が記憶に残るのは、ハーバード大学、ボストン大学、マサチューセッツ工科大学などの著名な英文学教授が、この小説を弁護するため証言台に立ったことである。この訴訟も、一九六六年の最高裁判決により合法であるとの決着がついた。⁵⁸

1965 年には、フランスの女性ジャーナリスト Anne Desclos⁵⁹が、匿名ドミニク・オーブリー(Dominique Aubry)またはポーリーヌ・レアージュ(Pauline Réage)

⁵⁴ Allyn, op.cit., p.63.

⁵⁵ Henry Miller (1891~1980), *Tropic of Cancer* (1932) ヘンリー・ミラー、大久保康夫訳、『北回帰線』、新潮文庫、1969 年。

⁵⁶ Allyn, op.cit., p.65.

⁵⁷ John Cleland, *Fanny Hill* (1748): Cleland は 1748 年に負債不支払者の入れられる獄中にてこの小説を書いたとされる。1749 年には、この本のために再逮捕されている。

⁵⁸ Allyn, op.cit., S.66.

⁵⁹ Anne Desclos (1907~1998).

のもと 1954 年に発表した小説『O 嬢の物語(*Histoire d'O/The Story of O*)⁶⁰』の英語訳が出版され話題となっている。

しかし 65 年は、なんといってもウィリアム・バロウズの『裸のランチ』⁶¹が出版された年として記憶に残る。この小説は、その斬新な手法や内容とは別に、それまで 50 年代末以来繰り返されてきた当局とエロティカ文学の闘いに文字どおり終止符を打った作品として、その歴史的な地位を得る。なぜなら、『裸のランチ』が 66 年に最高裁で勝利をおさめて以降、言語化された性表現を、それまで一貫して「あたかも追いつめられた獲物のように」⁶²捕獲しなければ気がすまなかった性の監督者たちは、突如としてその追求の鋒先をおさめるからである。まさにこの年を境に、「書店が挑発的性表現を売り物にする詩からハードコア・ポルノにいたる、ありとあらゆる性をテーマにする書物であふれかえった」⁶³とされるように、性表現の日常化と氾濫がはじまったのである。

今日セックスをとりあげる商業的媒体を否応なしに見慣れた視点からすれば、60 年代当時の官憲当局は、たかが文学作品を取り締まることに、なぜこうまで躍起になったのか、意外な感想をもつのではないだろうか。過ぎてしまえば信じがたいほど異質な世界での出来事にも思われがちな性言説にたいする当局の厳しい管理が、わずか半世紀ほど前までは、アメリカをはじめ西洋先進工業国で当たり前のことであった事実が、この時期に起きた意識変化の甚大さを物語っている。

以上にみたように、50 年代末から 60 年代にかけての時期が、ベビーブーム世代の思春期への突入、ピルによる性言説への好奇心を満たす自由な性行動への道が開けたことに反比例するかのごとく、権力の側の性表現への警戒心が消滅していく過程として特徴づけられ、それら三つの要素が相俟ってフーコーのいう性的欲望の装置に新たなギヤチェンジがうながされ、性の時代への下地を着実に形成した事実を知ることは重要である。

⁶⁰ ポーリーヌ・レアージュ、澁澤達彦訳、『O 嬢の物語』、富士見書房、1983 年。1967 年フランスで *Retour à Roissy* の題名で匿名出版。1975 年 *Emmanuelle* を 1974 年に撮って成功を収めた Just Jaeckin 監督により映画化。イギリスにおいてこの映画は、2000 年まで上映禁止であった。

⁶¹ William S. Burroughs, *Naked Lunch*, Grove Press New York 1959. 1959 年にフランス Olympia Press から初出版。ウィリアム・バロウズ、鮎川信夫訳、『裸のランチ』、1978 年。

⁶² Foucault, op.cit., p.20. フーコー、前掲書、28-29 頁参照。

⁶³ Allyn, op.cit., p.71.

VI. 性の解放を誘引した精神的要因(西欧一般)

1. 性の解放運動が西欧のプロテスタント地域を中心に起きたことの確認

西欧が、性的欲望と官能の問題⁶⁴をながいあいだ敵対視し、暗闇に追いやってきた事実に、遅蒔きながら気づくうえで直接の契機をもたらしたのは、すでにみたとおり、20世紀後半期にアメリカやイギリス、ドイツなどいわゆるプロテスタント色の強い国々を中心に起きた性をめぐる一連の解放へ向けた動きであった。こうした、性を抑圧から解放せねばならない対象としてとりあえずとらえる動きが、同じ西ヨーロッパにおいても、イタリアやフランス南部、スペインといった西欧の中でもアルプス以南の地中海文化の伝統に根ざす地域においては、すでに世界をリードする規範を提供する地域とみなされていた北米アメリカからの影響という面を除けば、それほど強いかたちでは起きなかったことは、つねに念頭に置いておくべきことだろう。

2. 性の解放を準備した外的3要素の確認

性を抑圧から解放すべきだととらえ、それを激しく押し進めるためのいわば外的条件が第二次世界大戦後に整えられ、それらが以下の三つの要素：

- 1) 第二次大戦後のベビーブーム世代の思春期化
- 2) 経口避妊薬（ピル）の開発
- 3) 性表現の自由化（文学作品の検閲の廃止）

としてまとめられることは、前回の講義においてすでに概観した通りである。

以上の三つの要素のうちで、ピルの発明や性表現の自由化とならび、ベビーブーム世代が総人口比において大きな割合を占めるようになった事実、すなわち性の解放運動の担い手が、やがて60年代後半以降に思春期を迎えるベビーブーム世代の若者たちであり、成長の過程においてセックスへの関心を強く抱くいづく時期に相当する若者人口が20世紀後半期に入った時代に、プロテスタント先進国において大量に存在したことが、性を解放するエネルギーを生むうえで直接的かつ決定的な要因となった可能性があるという指摘もまた、すでに確認したとおりである。

⁶⁴ 本講義では、当面これを「セクシュアリティ」という用語が意味するものとする。

3. 性を思想化する要求の台頭

しかしそこにはまた、性の解放運動が起きた原因を単純に人口と生理学がもたらすエネルギーだけに還元しきれない面、すなわち性交渉の相手を求める思春期を迎えた若者層のリビド過負担だけに押しつけることのできない、時代的特色がみいだせることにも目を向けねばならない。

それは、アメリカをはじめとするプロテスタント的伝統を引き継ぐ国々のベビーブーム世代によってその過半数が占められるまでになっていた大学生たちが、単に自由な性的な体験を強く求めただけでなく、性を知的な対象としてとらえる衝動に駆られていた事実である。

「彼らは性的自由がもつ意味について語り合い、それを文章化し、読書を重ねていた。それは理念が重視された時代であり、とりわけセクシュアリティに関する思想が、きわめて大きな問題ととらえられていたのである」⁶⁵

まずは、こうした若者たちによる西欧の歴史上前例をみない性に関する強い知的な好奇心と、その思想化にこそ人類の未来への改善策を託す強い意志が 20 世紀後半期に生まれていなければ、今日我々がおこない得ているような、性をめぐる問題を広く体系的にとらえ、そこに人間の生き方をめぐる根源的な思想を見いだすという性の言説化の潮流は生まれえなかったであろう。

つまり、性をもとに人間の生活を検証し直す学問的行為のすべては、フロイトを中心とした精神分析の流れを除けば、1960 年代に歴史上初めて幅広い規模で始まったといっても過言ではないのである。そうした意味においても、20 世紀後半期の西欧の若者たちが起こした、性を思想化しようとする動きは、まさに画期的なものであった。

4. 性の思想化が 20 世紀後半期に起きた理由

a. 性を思想化は性の近代的言説化の流れの一環なのか

しかしそもそもどうして、20 世紀後半期西欧のプロテスタント的地域に育った若者たちが、性についてこれほど真剣に考える欲求を強く抱くようになった

⁶⁵ Allyn, op. cit., p.196.

のだろう。まず思い浮かぶのは、それはフーコーが示してくれた意味での、近代以降一貫してその意識化がかきたてられてきた、性を危険なものとして言説化する強迫観念に似た要請の一環としてとらえられるのではないか、という見方である。

しかしそれでは、この時代にどうして、従来の性の特権的な担い手としてフーコーが分類し挙げていた教育、医学、経済学という三つの性の特権的領域⁶⁶とは別の場で、つまり、

- 1) 権力の側からの要請を受けずに、いやむしろ歴史上初めて権力に激しく対抗するための根拠として、
- 2) さらに、従来つねにそうであったように性を秩序の最大の敵・邪悪なものとして否定的にではなく、人間生活にとって善であるものとして肯定的に、

若者の間での性の言説化が顕著に加速することになったのか、という疑問への答はみいだせない。

つまり以上のように、20世紀後半期に激しく高揚した性の言説化の動きは、それが、

- ① 権力の要請を受けずに、権力に対抗するかたちで
- ② 否定的でなく、西欧史上初めての肯定的な言説化

であったことにおいて、フーコーが図式化した16世紀以降の近代化の発展と並行するかたちで起きた社会悪としての性の言説化とは、趣を異にするものであることは特筆すべきであろう。

b. 戦後ベビーブーム世代が史上初めてモラトリウムのゆとりをもったこと

20世紀後半期に、知的若者たちを中心として性のさらなる言説化としての思想化が加速したいまひとつの理由として考えられるのは、戦後のベビーブーム世代が思春期を迎えたのが、西欧諸国が経済繁栄を迎える時期に当たっていたことと関連している。H・スミードは、この時期のティーンエイジャーが急いで社会人の仲間入りをすることを要求されなかったことを指摘している⁶⁷、またD・アリンも、この時期の若者が、おそらく歴史上初めて大量な規模で「考える余裕」を与えられた世代であったことに言及している。

⁶⁶ Foucault, op. cit., p.116. フーコー、前掲書、148-149頁参照。

⁶⁷ Smead, op. cit., p.XX.

「60年代後半に思春期を迎えた若い男女は、未曾有の経済繁栄のなかで育ったのであった。その結果としてかれらは、将来の実利的な心配事をひとまずおいて、人生の楽しみを味わい、自分の理想にしたがって生きることが可能になったのである」⁶⁸

経済的な繁栄が若者たちに物事を深く考える時間と心のゆとりを与えたというのは、たしかに一理ある。しかしだからといってそれだけで、20世紀後半期の若者世代がセックスを、世の中を理解するうえでの根元的な問題として、西欧史上初めて重要視した理由の説明となるかという点、いささか説得力に欠ける面もある。

ここには、この世代が第二次世界大戦を体験した自分たちの親たちにたいして抱いた不信感を初めとする複雑な心情が、権力者にたいする強い怒りへと発展していく独特な過程に目を向けることが、どうしても必要となってくる。

⁶⁸ Allyn, op. cit., p.180.

VII. 性の解放を誘引した精神的要因(ドイツの場合)

1. 全体主義への傾倒と性の敵視の間にみられる親近性

ドイツにおいて1964年は、アウシュヴィッツ強制収容所をめぐる戦犯への判決が初めて言い渡された年として知られる。ドイツの暗い過去をめぐる真実への審判が下された出来事として社会の大きな注目を集めたこの裁判を契機に、当時思春期を迎えていたドイツのベビーブーム世代の若者たちは、自分たちの親や教師からドイツの暗い過去やファシズムをめぐる真実を盛んに聞き出そうとした。ユダヤ人に起きていたことを知っていたのか。戦争には進んで賛同したのか。ドイツ人は皆ナチだったのか。

しかしこうした質問に対し大人たちが全般的にみせた不可思議に曖昧な反応、つまり不安げで、どこか当惑したように質問をはぐらかしごまかそうとする態度からドイツの若者たちは、ひとつのある重要なことを理解する。それは、自分たちの親が全体主義を信奉し、ナチスに抵抗できないどころか、多くが進んで彼らのいいなりになってしまったことには、すくなくとも論理だった因果関係の合理的な説明はないということであった。

論理的に説明できない何か、1920年代から30年代にかけてドイツ人の大衆を政治に対し盲目にし、理性を失わせ、誤った方向へと結集させたに違いない。そして戦後に生まれた若者たちはやがて、自分たちの親たちには、話題にのぼった途端に、ナチの過去を問いただされたときと同じ、当惑げでばつが悪そうな反応を引き起こすテーマがもう一つ存在することに気づく。それがセックスに関することであった。

ドイツにおける68年世代による性の解放運動は、かつての18世紀末に起きたロマン主義運動や20世紀前半期にドイツ青年運動の若者たちが高らかにうたいあげたルソー的な自然回帰や肉体解放の精神といったある種共通した意識を受け継ぎながらも、そこには、過去の世代が体験しなかったナチスの暴力性という重い負荷がのしかかっていた。ドイツの戦後世代の若者たちは、自分たちの親のナチスへの関与を追究するなかから、ナチスの時代に起きた戦争やユダヤ人などにたいする残虐な暴力性に満ちた犯罪が、親の世代が同様に強く隠したがる性の問題と密接に関係している事実気づき始めるのである。

「当時若かった者たちは、親たちがタブー視したものに揺さぶりをか

けようとした。[中略] 若者たちは、親たちがどうして、肉体的な性愛を口にしてはならず、禁断で穢れたものとみなしたのかを知りたがった。同様にまた、ドイツ民族があれほどまでにヒトラーを溺愛した理由がなぜかを知りたがった。アウシュヴィッツ裁判がおこなわれた年が、進歩的な性の解明が突如として声高に要求され始める時期と重なるのは、けっして偶然とはいえない」⁶⁹

2. 68年世代の親たちが示した性をめぐる奇妙な二面性

U・ハイダーによる以上の証言からは、68年世代の親にあたる世代のドイツ人に、性をめぐる奇妙な二面性がみられたことが伺える。それらをまとめると、大体つぎのようになるだろう。

- 1) セックスに関わることを汚らしく、端から嫌悪し敵視すべきものとみなす精神がドイツ社会のなかに強く浸透していると同時に、そうした穢れたものであるはずの(とりわけ女性の肉体を通して表現される)セックス(=性的快楽)に惹かれてしまう自分を恥じる強い自責の念がドイツの男たちに強く意識されていたこと。(→自分は罰を受けて当然なのだという被虐的な心情)
- 2) こうした性をめぐる抑圧構造(=コンプレックス)を和らげ、また利用すべく、ヒトラー率いるナチスが格好の解決策を提供したことが、ユダヤ人の迫害や戦争にドイツ人の大半が進んで加担したこと、すなわち国民的規模の暴力的犯罪を生んだ真の原因をなしている可能性があること。

ここで否応なく思い起こされるのは、二人の偉大な先達者の言葉である。ひ

⁶⁹ “Die, die damals jung waren, rüttelten an den Tabus ihrer Eltern, denn sie litten unter ihrer sexuellen wie unter ihrer politischen Unaufgeklärtheit. Sie wollten wissen, warum den Eltern die körperliche Liebe als unsagbar, verboten und schmutzig galt, und auch, warum das deutsche Volk den Führer geliebt hatte. Kein Zufall war es, dass im Auschwitz-Jahr die Forderungen nach progressiver Sexualaufklärung plötzlich lauter wurden. Und vielleicht waren sogar die ersten Busenenthüllungen, die schockierenden Oben-ohne-Skandale zum gleichen Zeitpunkt, indirekter Ausdruck eines neu erstandenen Bedürfnisse nach Aufklärung, nach Enttabuisierung und Enthüllung des Verschwiegenen und Verborgenen in Vergangenheit und Gegenwart.” Ulrike Heider, *Freie Liebe und Liebesreligion: Zum Sexualitätsbegriff der 60er und der 80er Jahre*. Ulrike Heider (ed.), *Sadomasochisten, Keusche und Romantiker: Vom Mytos Neuer Sinnlichkeit*, Reinbek bei Hamburg 1986, p.93.

とつは、性的欲動を断念できないことへの罪責感こそが、文明の進歩を引き起こすうえで最も欠かせない要素なのだとしたフロイトの見解。もうひとつは、性への罪責感といった情緒的であるがゆえに、同じ文化内に属さない人間にとってはきわめて理解が困難でありながら、同時に文化のなかに強く浸透している共通意識こそが、文化をかたちづくる核心的要素をなしているというノルベルト・エリアスの視点である。

3. フロイトの文明論：欲動の断念と罪責感の強化

フロイトは、論文「文化への不満(Das Unbehagen in der Kultur, 1930)」のなかで、文化や文明の進歩の度合は、性的欲動の断念と欲動と快楽にたいする罪責感の強化の度合によって測られると述べたうえで⁷⁰、西欧文化は、「元来は女性および性生活に向けられていた心理エネルギー」を、文化を形成する目的に「転用」することで、「女性にはとうてい耐えられないような欲動昇華を押しつける」文化として発展した極致のひとつだと規定している。⁷¹

女性を、古来文化の主たる担い手であった地位から追いやり、男性だけのものとして文化を独占するために、西欧文化は女性に体現される性的快楽を嫌悪し敵視する伝統を打ち立ててきた。それと同時に男たちには「性欲を抑止すること」⁷²が強く要求され、それでも女性的快楽への誘惑に駆られる男たちには、自らの欲動にたいする厳しい罪責感を呼び覚ます厳しい掟が文化的伝統となって徹底されたのである。これによって禁欲をみずからに強いることを自明とする言説の浸透が図られ、そのためにふたたびフロイトの言葉を借りると、幼児の段階から性欲の存在自体を否定するまでに至る、きわめて特異な文化が西欧に出現したのである。⁷³

4. エリアスの文明論：文化に属さない者には理解が困難な情緒的価値

エリアスは、ある社会集団が「共通の体験に基づいて」形成した文化や文明

⁷⁰ Sigmund Freud, *Studienausgabe Bd.IX, Fragen der Gesellschaft Ursprünge der Religion, Das Unbehagen in der Kultur* (1930), Frankfurt am Main 2000, pp.227-228. ジクムント・フロイト「文化への不満」『フロイト著作集3 文化・芸術論』(高橋義孝他訳、人文書院、1985年) 458-459頁参照。

⁷¹ Freud, *op. cit.*, p.233. フロイト「文化への不満」、前掲書、463頁参照。

⁷² *Ibid.* 同上参照。

⁷³ Freud, *op. cit.*, pp.233-234. フロイト「文化への不満」、前掲書、463-464頁参照。

化をとりまく概念は、「定義の困難な、それでいてこの概念の意味の完全な一つの要素を表している情緒的で伝統的な雰囲気にとりかこまれている」もので有りながらも、それは確実に存在しているとしている。この考え方にもとづいて言えば、西欧文化をその根底から支える快樂の敵視と性に対する罪責感、たとえそれが安易に口にされないものではあっても、人々の心のなかに「自明の感情価値」として生きているということになる。

しかしそれは、「その社会に属さない」われわれ日本人を含む非西欧人のような人々にとっては「説明困難」であり、「この言葉にまつわりついている自明の感情価値について、ほとんど何も相手に伝えることはできない」ということになる。言い替えれば「こうした体験を共にせず、同じ伝統と同じ状況に立って語るのではない他の人々にとっては、これらの概念は色あせたままで、十分に生き生きとしたものにはけっしてならない」⁷⁴とエリアスが述べているように、西欧文化内での共通体験を持たない外部の人間にとって、快樂敵視とセックスに対する強い罪責感の存在は、きわめて理解が困難なものとして現れる可能性が高いことが判明する。

5. フーコーの性理論：性の科学と性愛の術の文化的な差異

こうした文化間を越境しての理解が困難となる問題が、セックスを対象としたものであるがゆえに、非西欧人にとっての理解がさらに輪をかけて困難なものとなっている疑いは、フーコーが示した「性の科学」を生みだした西欧文化と「性愛の術」を伝統とする非西欧文化の間に存在する、性に対する観念をめぐる深刻な違いを考慮すればさらに強いものとなる。

フーコーは、禁欲と禁欲の失敗への罪責感から成立する西欧文化の本質を非西欧人であるわれわれが認識しえない理由が、エリアスが挙げる共通の文化的体験をしてこなかったことにだけ帰結しうるものではなく、そもそも性と向き合う基本的な態度において、西欧文化が地球上のいかなる文化とも異なる特性を示してきたことにも由来する可能性を指摘している。フーコーは、人間の文化の大半に多かれ少なかれ共通してみられる性との関係を「性愛の術(ars

⁷⁴ Norbert Elias, *Über den Prozeß der Zivilisation: Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen Erster Band Wandlungen des Verhaltens in den weltlichen Oberschichten des Abendlandes*, Frankfurt am Main 1976, pp. 2-6. ノルベルト・エリアス、赤井／中村／吉田訳、『文明の過程・上』、法政大学出版局、2004年、69-73頁参照。

erotica)」と表現する一方で、西欧においてのみそれとは対照的に、女性に体现される性的快楽の敵視と厳格な禁欲の掟という伝統に近代以降の科学合理主義の精神が混ざり込んだ「性の科学(*scientia sexualis*)」が誕生したというのである。

「我々の文明は、少なくとも一見したところでは、性愛の術(*ars erotica*)を所有してはいない。その代わりに、性の科学(*scientia sexualis*)を実践しているおそらく唯一の文明であろう」⁷⁵

ここでいわれる性の科学を実践する姿勢は、一見すると近代的な科学合理主義によって性をめぐる真理を追究するかにみえながら、そこには、西欧に伝統的な性を邪悪視する禁欲の精神が強力に作用していることを見抜かねばならない。この真理に向かっているかに見せながらそこに強力な禁欲の枠をはめる奇妙な束縛が存在した結果、真理を追究する振りをしながら、じつは真理の浮上をなんとしてでも妨げる奇妙な「科学」が出現したことをフーコーは指摘している。周知のように16世紀以降の西欧は、すべての真理を科学合理主義によって解明し尽くそうとする強い「知への意志」によって貫かれていた。そのなかで性もまた当時進歩の著しかった医学の主導のもと、「科学」の範疇に組み入れられたかにみえた。しかし実際には「性の科学」だけが、他のすべてのサイエンスとは異なり、きわめて奇妙な形態をとったのである。それは、一見すると性も他の科学と同様、真理への到達を目的とする「知への意志」によって駆り立てられている体裁をとりながら、じつは性だけが、「知への意志」とはまるで正反対の「非知へ頑強な意志」によって貫かれたものであった。⁷⁶この非知への頑強な意志は、「性を取り巻く周囲に、そして性をめぐって真理を創りだすための膨大な装置を築いておきながら、結局は最後の瞬間に、その真実はつねに覆い隠されねばならない」⁷⁷ものとして機能し、その究極の目的は、「真理を語るのではなく、まさに性に関する真理が明るみになることを防ぐことにあった」⁷⁸というのである。

⁷⁵ Foucault, op. cit., p.58. フーコー、前掲書、75頁参照。

⁷⁶ “a stubborn will to nonknowledge” Foucault, op. cit., p.55. フーコー、前掲書、72頁参照。

⁷⁷ “they constructed around and apropos of sex an immense apparatus for producing truth, even if this truth was to be masked at the last moment” Foucault, op. cit., p.56. フーコー、前掲書、73頁参照。

⁷⁸ “the aim of such a discourse was not to state the truth but to prevent its very

6. 快樂敵視と性への罪責感を取りわけ強く意識するのがドイツ的文化である可能性

ここに出現したのは、まさにセックス(=性を快樂として認識すること)を社会秩序にとっての最大の敵と名指しすることを通して形成された文化である。ただ我々の考察にとって大いに問題となるのは、文明の進歩を測る基準をなす快樂敵視と快樂に惹かれる自らに対する罪責感の強化は、はたして西欧地域全般にわたって均等に現れたものだろうか、という疑問である。

フロイトもエリアスもドイツ語圏の出身であり、フーコーはフランス人ではありながらも、その活動の拠点パリを中心とした北フランスである。そしてこれらの思想家が、たしかに普遍性をもつ言説を提供しているか見えながら、じつはそれぞれが自らの生きた文化圏を基準に自らの論を展開した傾向が強いことを鑑みると、「罪責感が文化発展の最も重要な問題であることを指摘し、文化の進歩という成果を手にするには罪責感の増進による幸福感の減退という犠牲を払わねばならない」⁷⁹とフロイトの言葉によって表される女性的快樂の敵視と性への罪責感という二つの要素が組み合わさることによって生まれる文明を進歩させるための条件が、一面ではたしかに人類にとり普遍的な有効性をもつ様相を呈しているながら、しかしこれら二つの条件が、エリアスがいうところの「自明の感情価値」としてもっとも十全に機能していたのは、じつは地球上のきわめて限られた地域においてではなかったのか、という疑いがわいてくる。より具体的にいうと、これら二つの条件が誕生する必然性を持ち、それらが人々にとり自明の感情価値として生きてきた地域こそが、講義の冒頭で「世界の文化地図」が示していた資本主義が最も円滑に機能する地域、すなわちアルプス北方のヨーロッパ、とりわけその中核をなすドイツ語圏と重なっていたのではないだろうか。

ではこうした疑問の根拠となるものは何か。その最大のものは、西欧近代を根底から支える資本主義の引き金を引いたプロテスタンティズムが、まぎれもなくルターを筆頭とするドイツ語圏において生まれたものであり、資本主義誕

emergence“ Foucault, op. cit., p.55. フーコー、前掲書、72 頁参照。

⁷⁹ “... das Schuldgefühl als das wichtigste Problem der Kulturentwicklung hinzustellen und dazutun, daß der Preis für de Kulturfortschritt in der Glückseinbuße durch die Erhöhung des Schuldgefühls bezahlt wird.” Freud, op. cit., p.260. フロイト、前掲書、487 頁参照。

生の基盤をなすプロテスタンティズムという 16 世紀ドイツに生まれた新しい宗教的潮流を、それまでのローマ・カトリック教と最も際立たせていた点こそが、まさに女性的快樂の敵視と激しい罪悪感をとおした性の回避をより厳格に実践しようとする禁欲強化の姿勢にあったことによる。

7. ドイツ的ファウスト像と地中海的ドン・ファン像との違い

ヴェーバーが禁欲と資本主義精神の関係を論じるうえでいみじくも指摘したように、ファウスト像に集約される、まさにドイツ的文化の中においてしか生まれ得なかった人物像、すなわち、女性の性的魅力への嫌悪と、それに惹かれる自らへの自責の念とのあいだの葛藤に終生苛まれつづける性格が、今日に至るまで多くの男たちの共感を呼びつづけている事実こそが、快樂敵視と性への自責の念を「自明の感情価値」として強く意識する禁欲の精神の震源地がドイツ的文化のなか見いだせることを如実に言い表しているのではないだろうか。

「近代資本主義の精神の、いやそれのみでなく、近代文化の本質的構成要素(→エリアスがいう「文化をかたちづくる自明の感情価値」を思い起こすべき！：越智註)のひとつというべき、天職倫理を土台とした合理的生活態度(=西欧近代人の核をなす生き方：越智註)は、[中略]キリスト教的禁欲の精神から生まれ出たのだった。[中略]禁欲は修道士の小部屋から職業生活のただ中に移されて、世俗内の道徳を支配し始めるとともに、こんどは、非有機的・機械的生産の技術的・経済的条件に結びつけられた近代的経済秩序の、あの強大な秩序界(コスモス)を作り上げるのに力を貸すことになった」⁸⁰

まさにこの禁欲、すなわちフロイトが文明の進歩のために欠かせない要素として提示した欲動の断念をしごく自明のこととする近代的西欧人は、ヴェーバ

⁸⁰ “Ein konstitutiver Bestandteil des kapitalistischen Geistes, und nicht nur dieses, sondern der modernen Kultur: die rationale Lebensführung auf Grundlage der *Berufsidee*, ist – das sollten diese Darlegungen erweisen – geboren aus dem Geist der *christlichen Askese*. ... Denn indem die Askese aus den Mönchzellen heraus in das Berufsleben übertragen wurde und die innerweltliche Sittlichkeit zu beherrschen began, half sie jenen mächtigen Kosmos der modernen, an die technischen und ökonomischen Voraussetzungen mechanisch-maschineller Produktion gebundenen, Wirtschaftsordnung erbauen, ...” Weber, op. cit., pp.152-155 ヴェーバー、前掲書、363-365 頁参照。

一によって「専門の仕事への専念」と「全面性からの断念」を価値ある倫理規範とする「ファウスト的人間」⁸¹として説明され、それが同時に、エリアスがいう意味での「共通の体験」に基づく「自明の感情価値」となっていたことが、アルプス北方のドイツ的文化を、まったく同じ16世紀にイタリア・ルネサンスの基盤のなかから世俗された新時代の男の理想像として、女をつぎつぎと誘惑することで自らの全能性を証明する、禁欲にはまったく頓着しないドン・ファン像を生みだした地中海文化とは最も際立たせている点なのだといえよう。

もちろん禁欲を自明の感情価値としてことさら強く意識するドイツ的文化のなかから直接的にすぐさま近代資本主義が生まれたというわけではない。講義の冒頭で示した「世界の文化地図」において、資本主義の約束事が最も円滑に運用されているとされた地域が、今日ではドイツの北半分を含みながらも、むしろイギリスや北米英語圏とされていることが如実に物語っているように、ドイツで生まれたプロテスタンティズム的禁欲の精神は、カルヴァニズムから敬虔主義、そしてピューリタニズムへとさらに厳格な合理化を経るなかで、功利主義という独特な性格を纏うことによって初めてその今日につながる性格を持ち得たことはいうまでもない。ヴェーバーが、「中世における世俗内的禁欲の萌芽から発した禁欲的合理主義の歴史的生成とその純粋な功利主義への解体」⁸²と述べた言葉の意味は、まさに16世紀以降200年ほどを経るなかで、アルプス北方のヨーロッパ内でドイツ語圏からアングロ・アメリカンの文化圏へと資本主義の重要な地盤移動が起きたことなのであろう。

しかし我々が抱える当面の関心は、68年世代の性の解放運動を引き起こしたドイツ固有の要因を探ることにある。現在までの時点で判明したことは、性的快楽の敵視と女性的性の魅力に惹かれることへの激しい自責の念という二つの要素が、ドイツ的文化の核心をなす「自明の感情価値」となって20世紀後半期にまで受け継がれてきた可能性が高いことである。したがってわれわれは、こうした視点を保持しながら、ナチスの時代を生き延びた戦中派ドイツ人が戦後派世代に対して示したセックスへの強い嫌悪と罪責感、そしてそれが他民族への迫害や戦争という暴力へと結集していった複雑な抑圧構造の解明に向けてさらに

⁸¹ Weber, op. cit., p.153. ヴェーバー、前掲書、364頁参照。

⁸² “Dann endlich ist sein geschichtliches Werden von den mittelalterlichen Ansätzen einer ennerweltlichen Askese aus und seine Auflösung in den reinen Utilitarismus historisch und durch die einzelnen Verbreitungsgebiete der asketischen Religiosität hindurch zu verfolgen.” Weber, op. cit., p.153. ヴェーバー、前掲書、368頁。

歩を進めねばならない。

8. ドイツの 68 年世代が発見した性への敵視とナチスの暴力性との関連性

女性的快樂の敵視と性への罪責感というフロイトが規定した文明を進歩させるための二つの条件が、ナチスの時代を生きたドイツ人男性にとってエリアスという自明の感情価値となって社会のなかで強く生きつづけていた事実が、ドイツの場合、単に文明を進歩させるためだけに貢献したのではなく、ユダヤ人迫害と戦争という破壊的暴力の動力源となっていた可能性を考えてみる必要が、ここに生じる。

プロテスタント的禁欲を源泉とするドイツ的伝統をなしてきた性の抑圧構造と、20 前半期に顕在化したナチスの暴力性とのあいだに、奇妙な関連性が見いだせることに初めて気づいたのは、68 年世代の戦後ドイツの若者たちであった。かれらが、ナチスの時代のことを問いただした際に親の世代が示す、まるでセックスの場面を垣間見られたのに似たばつの悪そうな反応を目の当たりにすることで、ドイツにおいては、セックスの問題とユダヤ人など異人種への暴力的行動とが、とりわけ強く結びついていた可能性を疑い始めるのである。

したがって性の解放運動という同時代的な西欧の若者たちの風潮と一見歩調を合わせているかにみえながら、20 世紀後半期に起きたドイツの性解放運動には、ドイツにしか起こりえなかった独特な動機づけがあった。つまり、ドイツに伝統的な性的抑圧こそが、ナチスの暴力的犯罪を生みだす真の動力源をなしていた可能性を初めて暴き出そうとしたことにこそ、かの 68 年学生運動からその後の赤軍派テロリズムなどにいたる一連のドイツの若者の抵抗運動を、同じ時期に他の西欧先進諸国でもみられた性の解放運動とも、また 18 世紀末や 20 世紀初頭のドイツに起きたロマン主義的青年運動とも決定的に異ならせている点が存在しているといえる。

戦後ドイツの若者たちの心には、20 世紀前半期に二度も世界戦争を引き起こした自分たちの親の世代がみせた暴力的エネルギーの源を、なんとしても解明したいという真摯な願いがあった。そのためには、まず何よりも親たちが最も敵視し、罪責感を生む源泉とみなしてきたセックスを解放することこそが不可欠だと考えたのである。

9. 性の抑圧構造からユダヤ人迫害はいかにして生まれたのか

ただ西欧諸国のなかでもとりわけドイツにおいてきわめて顕著にみられた女性的快樂敵視と性への罪責感からなる男性的心理の複合体が、ユダヤ人の迫害と戦争の遂行という国民的規模の集団的暴力の実践へと結びつくには、長いあいだドイツ人男性を厳しく縛ってきた禁欲によって溜め込まれた性的エネルギー(参照→性への衝動と死への衝動)を、ユダヤ人を初めとする異人種を対象とする暴力的犯罪行為へと解放する道筋が、まずはつけられねばならなかった。ナチスは、長年にわたってドイツ国民のなかに蓄積されてきた性的抑圧から生じるエネルギーを、女性的快樂を敵視せず、性的快樂をむさぼることになんら罪責感を覚えない人間たちが自分たちの周りに存在するという言説を宣伝し広めることによって、激しい敵意と暴力的エネルギーへと転換することに成功したのだといえる。まさにこのドイツ的(=プロテスタント的)たる禁欲の二大条件に従わないドイツ領内に生息する許し難い存在としてのユダヤ人言説は、ドイツ国民が暗に求めていた性的抑圧の解放にとって、きわめて有効に作用したといえよう。

まさにこの古くからドイツ人男性の心に鬱屈していた性的快樂への激しい敵視とそうした女性的快樂に惹かれる自らへの罪責感という抑圧構造によって溜め込まれたエネルギーのはけ口を、ナチスがユダヤ人迫害と戦争の遂行というかたちで提供したこと、そしてそれにドイツ人の大半がみごとに進んで参加してしまったことを知ることによって初めて、先に示したU・ハイダーの証言に見られたような、戦中派世代がナチスの過去を問いただされた場合に示した、まるでセックスの現場を目撃されたときに似た奇妙にばつの悪そうな反応の真の中身が判明しはじめる。

ドイツにおいて「間違った性」に対する強烈な嫌悪感こそが、ユダヤ人迫害と戦争を生む暴力の源となった関係を、ドイツの文学者・歴史哲学者であるクラウス・テーヴェライトはつぎのように証言してくれている。

「注意深い若者の目は、大人たちが性に対してみせる強い不安感が、つねに過去の抑圧された暴力の歴史と何らかの関係をもっていることを、けっして見逃さなかった。[中略]ドイツにおいては、いたるところに息づいている暴力と歪められた性との結びつきが特別強烈であった。それはまさに戦争目的のひとつであったのだ。遅くとも1920年代までには国中を覆っていた〈間違ったセクシュアリティ〉からドイツ

を解放すること、つまり〈ユダヤ人の〉セクシュアリティに代わって別のかたちの、すなわちドイツ人のセクシュアリティを浸透させることである」⁸³

テーヴェライトの証言から読みとれるのは、まさにこの女性的快樂敵視と性的欲望に翻弄される自らに対する罪責感こそが、ユダヤ人への憎悪へと転換されていくドイツに独特な心理構造である。

ではそれはどのように機能するのか。いまいちど整理しておこう。それはまずは、

- 1) 性のなかのとりわけ生殖を目的としない快樂につながる部分を敵視する倫理観⁸⁴と、
- 2) にもかかわらず性的快樂に惹かれ、溺れてしまう自分への嫌悪・罪責感⁸⁵

とがきわめて強くする文化的伝統としてドイツ語圏に存在していたこと、つまりエリアスのいう「共通の体験」に基づく「自明の感情価値」としてドイツの社会や文化のなかに深く浸透していたことが前提となる。そして、それはこれまで検討を重ねた状況からみて、ヨーロッパのなかでもとりわけドイツにおいて強く存在してきた可能性が極めて高いのである。

つぎに、性的快樂を敵視することによって16世紀以降築きあげられてきた近代的社会秩序を根底から腰砕けにする可能性をもち、そうであるがゆえに男たちに強い罪責感を生じさせる原因をなす女性の性的魅力への強烈な憎しみを、性的快樂に対し罪責感をもたないとみなされる劣等な人種(と位置づけられるユダヤ人)が存在することを強く意識化することで相殺し、同時にもともと存在している女性への憎しみによって蓄えられた攻撃的エネルギーを、ユダヤ人の

⁸³ “Den aufmerksameren unter den Jugendlichen entgeht nie, daß die starken Ängste der Erwachsenen vor dem Sexuellen immer etwas zu tun haben mit unterdrückten Gewaltgeschichten der Vergangenheit. ... In Deutschland war diese Koppelung von allgegenwärtiger Gewalt mit deformierter Sexualität besonders stark. Es war geradezu eins der Kriegsziele gewesen, das Land von der “falschen Sexualität”, mit der es überzogen war seit spätestens den 20ern, zu befreien, anstelle der “jüdischen” eine andere Form von Sexualität, die deutsche, zu setzen, ...” Klaus Theweleit, *Ghosts: Drei leicht inkorrekte Vorträge*, Frankfurt am Main/Basel 1998, p.106.

⁸⁴ これは、フロイト的観点からいえば、脱エディプスを志向する超自我形成(文明秩序を構成する掬づくり)に結びつく倫理観といえよう。

⁸⁵ 快樂を志向する意志は、父親による女(母親)の独占を解除したい欲求であり、それは父親殺しに結びつき、やがて深い罪責感を生む元になると共に、その「罪責感」こそが文明の進歩をもたらすというフロイトの論説「文化への不満」「トーテムとタブー」とも関連している。

快樂に罪責感を覚えない「間違ったセクシュアリティ」を正すという大義名分の元に実践される具体的な暴力行為へと転嫁するプロセスが生まれる。これが、女性嫌悪と性的快樂への罪責感を取りわけ強く蓄える伝統をもつドイツ語圏において、反ユダヤ主義がとりわけ強く表れた心的原因の概要である。

10. 性のドイツ的抑圧構造からは戦争への衝動も生まれた

そして性的快樂を敵視するよう教える伝統のなかで育ちながら、まさにそうした禁欲的倫理が強烈であるがゆえに、嫌悪すべきセックスに惹かれる自分を被虐的に責める心的抑圧構造が、うえにみたようにユダヤ人の「倒錯した異常な性」を蔑視し正す行動を実践に移すことで相殺され、そうした「癒し」を求める大衆の集団心理が、ナチスによってやがてユダヤ人迫害から戦争へという暴力的行為に結集されていった過程をテーヴェライトは、つぎのように説明している。

「ドイツ人のセクシュアリティとは、すなわち世界大国を目指すことと優越民族であること、世界中を支配下に治める期待感からくる性的興奮が自らの肉体を貫くなか、ドイツ人に特有な〈純粋な性〉によって高貴なものへと祭り上げられた心的複合体（コンプレックス）のことである」⁸⁶

⁸⁶ ”..diesen ganzen Komplex von aufstrebender Weltmacht, Herrenrasse, die Durchdringung ihrer Körper mit aufgegeilter Welteroberungserwartung, gabelt von der spezifisch “reinen Sexualität” des Deutschen.” Theweleit, op. cit., p.106.

VIII. ドイツ的暴力が生まれる源泉

1. 「ドイツ人男性に特有な病」としての反ユダヤ主義と母性恐怖

戦後ドイツにおいて精神分析医の立場からナチの精神構造の解明に挑んだことで知られるマルガレーテ・ミッチャーリヒもまた、その著書『女性と攻撃性』において、ドイツ人が伝統的に抱いてきた女性的快楽の敵視と性的欲望への罪責感からなる文化的心情が、ユダヤ人への激しい憎しみを生むうえで決定的な役割を果たしたことを指摘している。彼女の分析は、女性的快楽の敵視と性への罪悪感という二つの要素が、とりわけドイツにおいてエリアスがいう「自明の感情価値」として文化の核心にとりわけ強く息づいていた結果、それがユダヤ人迫害と戦争という破壊的暴力を他の民族とくらべ突出して発生させる動力源をなしたとする、68年世代の直感を経てテーヴェライトにいたる、これまで講義をとおしたどって来た視点を裏づけながらも、さらに、そうしたドイツ的な自明の感情価値が生まれる根底に、父親の不在を背景とした母性への恐怖と憎悪という、これまたドイツの歴史に古くから通底する特殊性が存在していたことを、新たに指摘してくれている点において注目に値する。

反ユダヤ主義をまずミッチャーリヒは、「ドイツ人の精神的病」として規定している。彼女によれば、ユダヤ人を含む外国人にたいする偏見は、第2次世界大戦後の時代においてもドイツ人のあいだに生きつづけており、それは「自分が拒絶した精神的衝動が投影され、置き換えられたもの」が原因となって生まれているとされている。そして、そこから発生する特定の外国人を迫害するものには、「抑圧し、タブー視している自分自身の性格や願望、感情の投影」⁸⁷が作用しているというのである。

ミッチャーリヒがいう「自分が拒絶した精神的衝動」とは、すでにエリアスが示した自明の感情価値としてドイツ文化のなかに古くから伝統として生きつづけてきた女性にまつわる性的快楽を罪悪として敵視する心情であることは容

⁸⁷“...jede Vorurteilskrankheit besteht aus Projektionen und Verschiebungen eigener abgelehnter psychischer Impulse. ... Immer werden die Schwächsten im Lande Opfer der Projektion eigener verdrängter und verpönter Eigenschaften, Wünsche und Gefühle.” Margarete Mitscherlich, *Die friedfertige Frau*, Frankfurt am Main 1985, p.149. マルガレーテ・メッチャーリヒ、杉村・関田・後藤・柳沢訳、『女性と攻撃性』（第11章：反ユダヤ主義は男性の病か 11. Antisemitismus – eine Männerkrankheit?）、思索社、1989年、209頁。

易に想像がつく。また「自分が抑圧し、タブー視している自分自身の心理と特性や願望の投影」いわれているものは、なんとか拒絶しようとしながらも、どうしても女性の肉体的、性的魅力に引きつけられてしまう自らの性的欲望であると同時に、そうした罪悪であるはずの性的快楽に引きつけられる自分の内面に埋め込まれた性格にたいする嫌悪と罪責感を指しているであろう。

2. 〈男性的〉反ユダヤ主義と〈女性的〉反ユダヤ主義

とりわけ19世紀後半期以降、ドイツ語圏において継続的に強まっていく反ユダヤ主義的心情⁸⁸を、〈男性的〉なタイプと〈女性的〉なタイプに分けて分析している点においてもミッチャーリヒは特筆に値するが⁸⁹、しかしあくまでも彼女の基本的な観点は、反ユダヤ主義を男性に特有な兆候とみなしている点にあるといえよう。したがって、たとえ女性がそれに進んで賛同する例がみられたとしても、それはあくまでも男性的病理への順応（エディプス期以降に女性がみせる兆候）、つまり亜流であると位置づけられている。この辺りはどういうことなのか、少し詳しくみてみよう。

フロイト以降知られているように超自我の形成は、男性に特有な（あるいはすくなくとも男によりはっきりしたかたちであらわれる）プロセスとして規定されることからして、ミッチャーリヒもまた

「反ユダヤ主義が主に超自我の病であるということが正しいとしたら、反ユダヤ主義は女性の超自我の発達よりも男性の超自我の典型的な発達に関係している。反ユダヤ主義へと向かうような超自我の構成を女性は生来、持ち合わせてはいない」⁹⁰

⁸⁸ ミッチャーリヒは、キリスト教的偏見に基づく「宗教的反ユダヤ主義」と近代以降あらわれた「人種主義的反ユダヤ主義」を区別している。”Der moderne Antisemitismus, der sich hundert Jahre vorwiegend rassistischer Argumente bediente, unterscheidet sich weitgehend vom religiösen Antisemitismus des Mittelalters” Mitscherlich, op. cit., p.148. 「ヒトラーのもとで主に人種主義の根拠に利用された現代の反ユダヤ主義は、中世の宗教的反ユダヤ主義とはまったく異質である」ミッチャーリヒ、前掲書、207頁参照。

⁸⁹ Mitscherlich, op. cit., pp.155-159. ミッチャーリヒ、前掲書、217-222頁参照。

⁹⁰ “Wenn es zutrifft, daß Antisemitismus vorwiegend eine Überich-Krankheit ist, so hat sie weit mehr mit der typischen Entwicklung des männlichen als mit der des weiblichen Überichs zu tun” Mitscherlich, op. cit., p.159. ミッチャーリヒ、前掲書、223頁参照。

という立場をとっている。

たとえ女が反ユダヤ主義に進んで同調する場合がみられたとしても、それは、女性がエディプス期以降に示す特有な兆候としてフロイトが規定したこと、すなわち自分がまわりから愛されなくなるかもしれないという不安（＝愛情喪失の不安）をもとに形成される女性的な行動規範が、男性の示す主張に順応を促した結果だとしている。

「女性の反ユダヤ主義は、女性特有の発達の仕方や特有の教育から生じたというよりも、男性の持つ偏見に順応することで発達した」⁹¹

3. エディプス期以前に男性に刷り込まれた母性へのコンプレックス

では、男性に特有な病理としての反ユダヤ主義はどのようにして生まれるのか。メッチャーリヒは、フロイトの研究成果が「少年の去勢不安」や「女子のペニス羨望」に関する分析、すなわちエディプス・コンプレックスが消滅し超自我が生まれるまでの男性的プロセスに関する洞察は深めたものの、それよりさらに深い部分に存在することが想定される「はるかに深い母親羨望の心層」については、その研究がとりわけ男子の場合になおざりにされてきたというベッテルハイムらの立場を支持している。⁹² ここで言われていることは、男たちが抱く、母親に代表される「女性への無意識的な憎しみや羨望」が、「父親への抑圧された憎しみ」によっても相互的に強化されるなか、とりわけドイツにおいて、その対象がユダヤ人に置き換えられる心的構造が存在してきた可能性である。

ミッチャーリヒは、フロイト以降女性が抱く去勢コンプレックスの方は、自明でありながら大きな謎としてとかく注目を集めたが、男性がもつ女性、とりわけ母性にたいする複雑な劣等意識は、正当な評価を得てこなかったどころか、じつは「男性の女性性に対するコンプレックスは女性が抱く去勢コンプレック

⁹¹ “Der Antisemitismus der Frauen entwickelt sich eher über die Anpassung an männliche Vorurteile, als daß er sich aus der geschlechtsspezifischen entwicklung und Erziehung ergibt.” Mitscherlich, op. cit., p160. メッチャーリヒ、前掲書、223 頁参照。

⁹² “..., der Penisneid des Mädchens wie die Kastrationsangst des Knaben würden in der Psychoanalyse überbetont und die viel tiefere seelische Schicht des Neides auf die Mutter, vor allem beim Jungen, vernachlässigt.” Mitscherlich, op. cit., p154. メッチャーリヒ、前掲書、215 頁参照。

スよりもはるかに不可解でまだ解明されていない」⁹³とする立場を支持する。

ここに、反ユダヤ主義を男性的な徴候と規定しえたうえで、さらにその核心にある女性的快樂の敵視と性的欲望への自責の念を生みだす源泉に、母性に対しドイツの男たちが過去の歴史をとおして抱いてきた心情が、エリアスがいう「自明の感情価値」となって作用している可能性が浮上する。言い替えれば、ミッチャーリヒが「自分の拒絶した精神的衝撃」あるいは「自分が抑圧し、タブー視している自分自身の心性と特性や願望、感情」と定義する反ユダヤ主義を生む複雑な男性的心理の根源には、究極的にみると、幼児期に個々人のなかで追体験される原初的な時代にドイツ人男性が味わった、母をめぐる共通の文化体験（→のちにエリウスがいう「自明の感情価値」となっていく源泉）があることが強く疑われるのである。

4. 母親羨望と女性(=ユダヤ人)憎悪

男性の女性性に対するコンプレックスは、女性の去勢コンプレックス（→エディプス期 [3-5 歳] に発生）よりもはるかに古く根源的である⁹⁴にもかかわらず、西欧文化内においては抑圧されたまま、いまだ解明の糸口がつかめていない。

西欧以外の文化に目を向けると、しばしば思春期に執り行われる儀式のなかに男性が女性の特徴を身にまとい、男性の女性願望を象徴的に満足させるものが見られる。これは、非西欧文化が長年にわたって培ってきた知恵が「女性への無意識的な憎しみや羨望を〈自由思想〉の西洋文明国の人びとよりもうまく処理している」⁹⁵証左だとミッチャーリヒは指摘している。

こうした男性の女性への無意識的な憎しみや羨望を儀式化する〈ガス抜き機能〉をもたないどころか、男性と女性のジェンダーの壁を高く築き、その横断を厳しくタブー視してきたことにこそその特徴がある西欧世界においては、父

⁹³ “..., daß der Weiblichkeitskomplex der Männer um vieles ungeklärter und dunkler sei als der Kastrationskomplex der Frauen.” Mitscherlich, op. cit., p154. メッチャーリヒ、前掲書、216 頁参照。

⁹⁴ ここで根源的だとされる意味は、子どもの性的発達段階においてエディプス期（＝男根期 phallic phase、性器段階：3-5 歳）より以前の肛門期 anal phase（2-4 歳）にすでに起きているものとして想像される。

⁹⁵ “... und auf diese Weise mit unbewußten Haß und Neid auf die Frau besser fertig zu werden als der ‘aufgeklärte’ Mann der westlichen Hemisphäre.” Mitscherlich, op. cit., p.154. メッチャーリヒ、前掲書、216 頁参照。

親への抑圧された憎しみと母親にたいする羨望という二つの要素が、子供の時代にうまく処理されないまま個人の心的内面に残り、そのふたつが相俟って作用するなかでユダヤ人への迫害意識が芽生えた、というのがミッチャーリヒの見解である。

ここで示される基本的で重要な点は、母性への〈羨望〉から〈憎しみ〉が生まれるという構図である。つまりここでは、〈羨望〉と〈憎悪〉はほぼ同義語として理解されるものである。肛門期において女性がかつてもつものとして理解された母の圧倒的な権力への羨望から転化した無意識の憎悪が、世の中の〈女性的存在〉としてのユダヤ人に向けられたとき、反ユダヤ主義は発生するというのである。

「絶大な権力をもつ母への無意識的な憎しみへの防衛が反ユダヤ主義のさらに重要な要素であり、母親によってかきたてられた不安が子供に波及し、ユダヤ人に置き換えられ、〈不気味なユダヤ人〉を作りあげている」⁹⁶

5. 父親の不在と禁じられた母親への性的願望が生むドイツ的暴力の構造

ミッチャーリヒは、母への性的欲望を実現するうえで最大のライバルとなる父親の権力にたいする不安が幼稚なかたちで存続しつづける〈父親憎悪の投影〉と、母への性的願望〈近親相姦願望〉を果たし得なかったことからくるナルシスティックな屈辱が同時に共存するなかで、父親の権力を内面化する正常な超自我形成がうまくいかないまま、いやすことのできない心的外傷(トラウマ)と化して成人後にも残ってしまう「超自我の変異(Überich-Deformation)」こそが、反ユダヤ主義の真の正体であると定義している。⁹⁷そして、こうした超自我の病におかされた男たちが、ドイツにおいてきわめて多くみられたことこそが、ドイツにおいて反ユダヤ主義が最も盛んに勃興した原因だとしている。

では、どうしてとりわけドイツにおいて、父親の権威に対する過度な不安と母親へ性的願望を抱くことへの罪責感から超自我をうまく形成できない男たち

⁹⁶ “Auch andere Psychoanalytiker wie Fenichel, Wangh, Grunberger sehen als weitere wichtige Komponente im Antisemitismus die Abwehr des unbewußten Hasses auf die allmächtige Mutter, deren angsterregenden Aspekte nach der Verschiebung der ‘unheimliche Jude’ verkörperte.” Ibid. 同上参照。

⁹⁷ Mitscherlich, op. cit., pp.151-152. ミッチャーリヒ、前掲書、212-213頁。

が多く現れたのだろうか。ミッチャーリヒは、第一次世界大戦期（1914-1918）に幼少期を過ごしたドイツ人男子の多くが、1920年代終わりの世界恐慌期の経済的窮地を体験したのちにヒトラー信奉者へと変貌していったことの因果関係を、つぎのように説明している。まずは、この時期のドイツ人男子の多くに共通していたのは、

- ・ 大戦中彼らは父親不在のもとに成長した。
- ・ 戦争の窮状からくる母親の不安は子どもにも波及した。

という点であった。この状況とそのあとにくるドイツの敗戦は、超自我を形成するはずの時期にある男子に、つぎの二つの重要な障害をもたらした。

- ・ 母親だけとの長い生活から、不在の父親像が過度に権威化され美化された結果、母への性的欲望とその禁止（エディプス・コンプレックス）と、それに相応した去勢不安が過剰に強められた。
- ・ 敗者として戦地から戻った父親は母親へのライバルであると同時に、権威が失墜した存在として子供にナルシスティックな屈辱感をもたらした。

以上の第1次世界大戦における父親の不在をめぐる状況は、一方では母との性的関係を離脱しエディプス期へと正常に移行することが阻害されると同時に、父親の長い不在からくる父親像の過度な理想化と厳格化による恐怖と罪責感を生みつつも、結局ドイツが敗戦を迎えたことによって、理想化していた厳格な父親像が崩れ、それによってナルシスティックな屈辱感がドイツの男子に生じた。この性的罪責感とナルシスティックな屈辱という二つの心的要素は、ドイツ人男子の心のなかに〈克服しがたい葛藤〉となって刻印され、そこからユダヤ人という内的他者にそのすべての責任を押しつける〈置き換えと投影による防衛体制〉が生まれたというのが、ミッチャーリヒが超自我の不完全な形成から反ユダヤ主義が生まれる過程を説明する概要である。⁹⁸

ここで重要なのは、ドイツ人男子が抱くユダヤ人への憎悪は、最初からユダヤ人の存在にその原因があるのではなく、克服しえない母への性的欲望とそれに対する罪責感、そして父親の不在に対する恨みが絡み合ったコンプレックスがそもそも心的問題として存在し、なかでもとりわけ「全能の母に対する無意識の憎悪」を「恐ろしく計り知れないユダヤ人」が体現しているとみなす〈置き換えと投影による防衛体制〉によって初めて生まれ得たものとして論じてい

⁹⁸Mitscherlich, op. cit., p154. ミッチャーリヒ、前掲書、216頁参照。

る点である。⁹⁹

たしかに反ユダヤ主義が生まれる背景には、

- ・ 社会の行き詰まった状況を変える必要があるとき、そうした革命的衝動への反動として、人びとの目先をそらせる〈避雷針〉として利用される。
- ・ 古い生活を破滅させるかにみえる資本主義経済の具体的な担い手としてユダヤ人を見る。
- ・ ユダヤ教にたいするキリスト教徒の〈父親殺しの願望〉、すなわち自分たちより先にあったユダヤ教徒ユダヤ民族への嫉妬や、おなじ宗教的ルーツをもつ兄弟としてのライバル意識。

といった従来から語られてきた複数の要素が作用している事実は認めながらも、それを根源的要因とはみなしていない点に、ミッチャーリヒの特徴がある。

むしろ彼女は、ドイツ人男性の心のより深い部分に宿る要素を問題にする。ドイツの文化内においては、一見すると男子の超自我形成が、他の国と比べてより厳格に達成されているかに見えながら、じつはエディプス期以前の母親の支配力と母親への性的願望が圧倒的であった〈肛門期〉からの脱皮がうまく達成し得ていないことにこそドイツ的暴力の源泉を見いだそうとしているのである。¹⁰⁰

ここで新たに生まれる疑問は、はたして父親不在に対する怨恨と母性への羨望と恐怖からなる二つの要素は、20世紀にはいつてからドイツ人男子に初めて体験されたものなのだろうか、というものである。ドイツの歴史を振り返ると、それはある意味で遙かゲルマン民族異動期以来ドイツ人男性の心にすり込まれた〈自明の感情価値〉であった可能性が強く疑われる。

6. ドイツ人男性の国民的病としての〈故郷の喪失〉への危機感

この問題に立ち入るまえに、理解しておかねばならないドイツにおける反ユダヤ主義に特有な性格がある。それは、ユダヤ人への憎悪や反感の原因が、外的他者にたいする人種差別¹⁰¹としてではなく、同じ社会のなかに共存してきた

⁹⁹ Mitscherlich, op. cit., p154. ミッチャーリヒ、前掲書、216頁参照。

¹⁰⁰ Ibid. 同上参照。

¹⁰¹ ミッチャーリヒは、「密接に西欧キリスト教文化と結びついていたことなどが原因となったユダヤ人にたいする人種差別は、黒人、蒙古人、アメリカインディアンがうけたそれとは異なっていた」として区別している。ミッチャーリヒ、前掲書、208頁参照。

他者が、ドイツに固有な文化を破壊しかねない脅威として認識される理由から生まれている点である。

ミッチャーリヒは、他者的異文化が自国内に永続的に住み着くことによってもたらされるドイツ独自の言語文化が喪失することへの不安が、20世紀初頭からナチスの時代にかけてだけでなく、第2次世界大戦を経た戦後ドイツ社会においても、もっぱら男たちによって表明されるものであったことを証言している。¹⁰²

「何百万人もの外国人とその家族がドイツに移住することにより、われわれの言語、われわれの文化、われわれの国民性が自分たちとはかけ離れた異質なものと変わってしまうことに大きな危惧の念をもっている。」¹⁰³

これは一見すると、一定数以上の外国人の流入を経験した場合、どこの国でも起きそうな危機意識であるようにも思える。しかし、ドイツの男たちが、外国人の存在を、自らの言語、文化、国民性を決定的に変容させる要素とみなしている点、つまりドイツ固有の言語文化が失われることへの過剰ともいえる危機感を抱いたうえで、その原因をもたらす存在として外国人への憎しみをかきたてていることは、やはり特筆すべきことであろう。これは、そのあとで「多くのドイツ人は、この理由から〈自らの故郷のなかの異邦人〉と化してしまった」¹⁰⁴と記されるように、ドイツ人がその心的深層において何よりも恐れていることが、自分たちの故郷が失われてしまうことであることが判明するにいたって、ドイツ人に固有な歴史に根ざした問題である可能性が強まる。

7. これまでのまとめと今後の方向性

¹⁰²1982年に『ツァイト』誌に掲載された〈ハイデルベルク宣言〉Mitscherlich, op. cit., pp.149-150. ミッチャーリヒ、前掲書、209頁。

¹⁰³ “Mit großer sorge betrachten wir die Unterwanderung des deutschen Volkes durch Zuzug von vielen Millionen von Ausländer und ihren Familien, die Überfremdung unserer Sprache, unserer Kultur und unseres Volkstums.” Mitscherlich, op. cit., p.150. ミッチャーリヒ、前掲書、209頁参照。

¹⁰⁴ “Viele Deutsche sind aus diesem Grunde ‘Fremdlinge in der eigenen Heimat’ geworden.” Ibid. 同上参照。

言語を失うことによる故郷の喪失こそが、じつはドイツの歴史において、父親の不在、母親との性的な愛憎関係と深く結びついた伝統として、ゲルマン人がヨーロッパ全土を初めて武力で席卷し、今日につながるヨーロッパ的秩序をつくりあげたあの5-7世紀時代にまで遡る問題であることについては、本講義につづく先端文化思想論 B が、その中心テーマとして取りあげることになる。そこでは、母性への憎悪に根ざす女性的快樂の敵視と肉欲に対する罪責感が、20世紀の反ユダヤ主義を通して初めて生まれたものではなく、じつは、当時ヨーロッパの支配者となったドイツ人の祖先にあたる男たちが驚愕をもって体験した〈故郷の喪失=Heimatlosigkeit〉にこそ、そのルーツが見いだせる可能性が高いことを論じる。そしてこの体験が、いわばトラウマと化してドイツ人男性の心的深層に奥深く浸透した結果、過剰なまでに厳格な禁欲の思想がヨーロッパの中世をとおして生みだされ、それがやがては近代資本主義の元をなすプロテスタンティズムを生みだすもととなった歴史をたどることになる。

しかし本講義の眼目が、あくまでも20世紀に起きた女性と性の解放が、資本主義という男性体制のトポロジーにおよぼした影響を解明することであることをつねに忘れてはならないことを最後に強調しておきたい。その目的に沿うなかで、ナチスの暴力を引き起こした根源的な原因に女性(=母性)的なるものに対する憎悪が潜んでいることをつきとめるところまで現時点では到達した。さらに、そこから生まれる性的快樂への敵視の構造を理解するためには、どうしても現在に通じるヨーロッパ体制が生まれた中世の起点にまで遡る必要がある。それがすでに述べたように、次学期の講義であつかう問題となるのだが、それも、女性的なものとの対決こそが西欧の資本主義が今日みられるようなグローバルな規範と化していく過程のなかで、圧倒的に不可欠な要件であったことを主張するために必要な段階であるに過ぎない。

振り返れば20世紀前半期には、ちょうどナチスの第二次世界大戦期を挟むようにして女性と性の解放をめぐる、類似性に富む出来事が二度起きている。それは第一に、19世紀末から20世紀にかけて起きた第1次女性解放運動とその後20年代を中心に広く芸術から大衆文化にいたる分野で花開いた女性と性を開放的に表現しようとする諸現象である。ただ、ドイツで起きたこうした女性と性に開放的な風潮は、やがてナチスに弾圧されるよりはむしろ、自ら進んで吸収されていくという奇妙な現象がみられた。この現象は資本主義の発展にとってどのような意味をもったのだろうか。

第二次世界大戦は、非合理性に惹かれるロマン主義的な国民性と主観的理念への信頼を精神面で残しながらも強引な工業化に呑み込まれていったドイツ人が抱いた分裂症的な矛盾を巧みに利用ながら覇権を試みたナチスと、民主主義と功利主義的合理主義の浸透を目指すアングロ・アメリカン文化との一騎打ちという構図で眺めることができる。ドイツ的精神を打ち負かしたことで、戦後の時代において主観的理念の衰退と、それにとまなう合理主義的効率と功利主義を文句なしに掲げる資本主義の発展に拍車が掛かったことは言うまでもない。

そして我々が注目する 1960 年代以降に起きた女性と性の解放運動である。この時期に起きた現象のかなりの部分が、20 年代ドイツを中心に起きた青年運動と似ていることは言うまでもない。問題は、このほとんど二段階に分けて計画的に起きたかにさえみえる女性と性の解放を目指す動きが、資本主義の新たな展開にとってもった意味である。資本主義の巨大化とグローバルな展開にとっては、西欧の男たちが最も恐れに組んできた性的快楽とその担い手である女性との関係に最終的な決着をつけることが、是が非でも必要であった。その点を証明するところまで来学期の講義で到達できるか、現時点では確信がもてないが、その方向性だけは見失わないようここに示しておきたい。